

図版18 1.13号墓(南東より), 2.13号墓主体部(東より), 3.14号墓検出状況  
4.17号墓(西より), 5.18号墓(西より)



図版19 1.16号墓(西より),  
2.16号墓断面(西より),  
5.19号墓(北より),  
6.作業風景

3.15号墓(南より), 4.15号断面(南より)



図版20 黒川塚跡東遺跡 1.1号墓, 2.2号墓, 3.3号墓



1



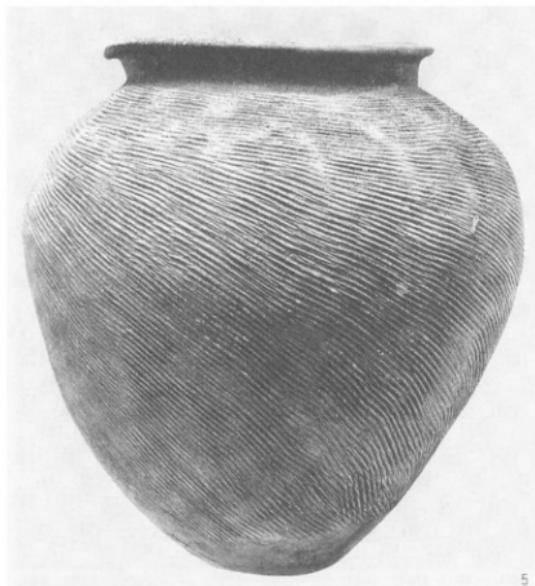
2



6



4



5



3

図版21 遺物写真 珠洲悅(藏骨器) (縮尺1/4)  
(図版2参照)



3-3



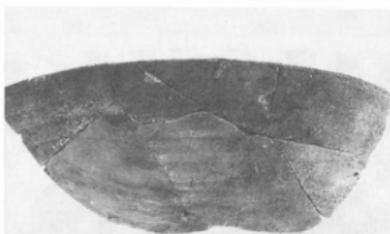
3-2



3-1



4-9



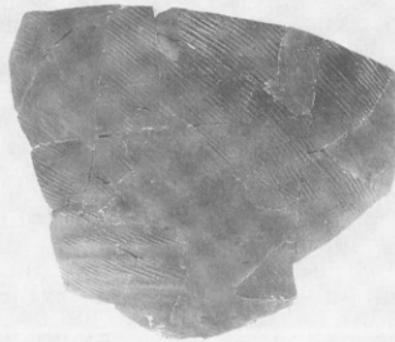
4-8



3-5



3-4



3-6

図版22 遺物写真 珠洲焼(底骨器) (図版3,4 参照)  
(縮尺1/4)



21



1



22



3



23



20



24



13



25



9



26



11



28

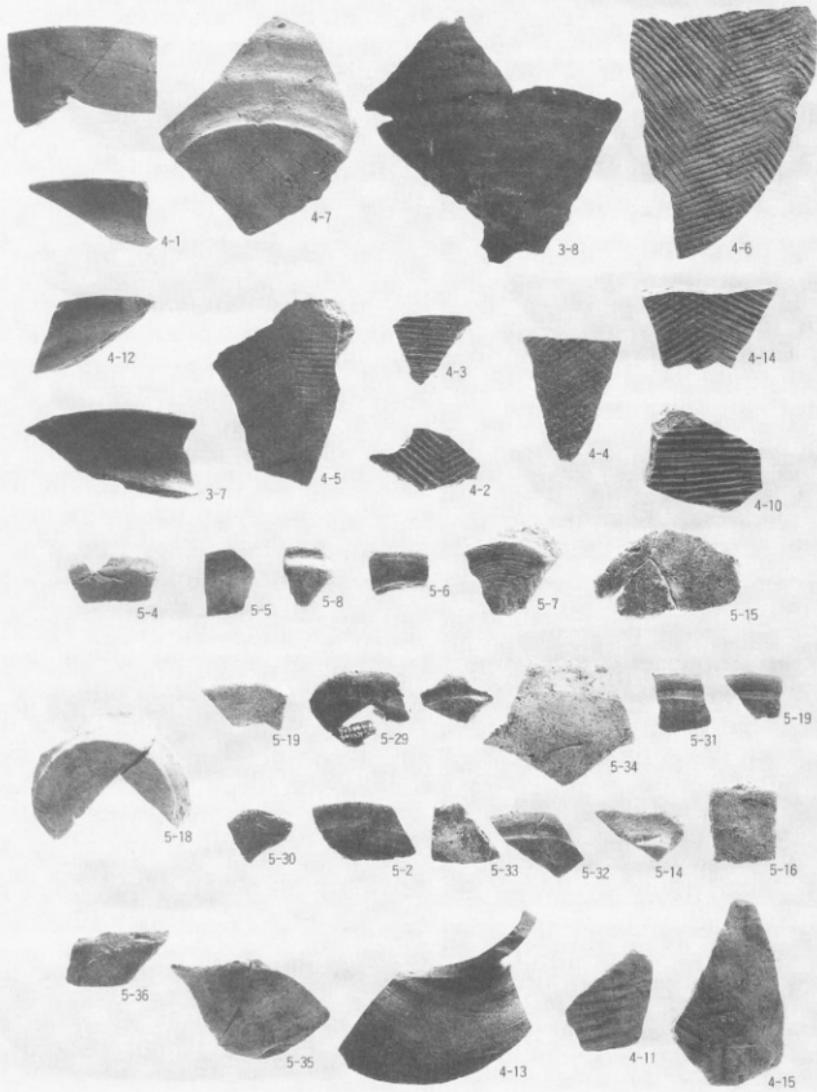


17

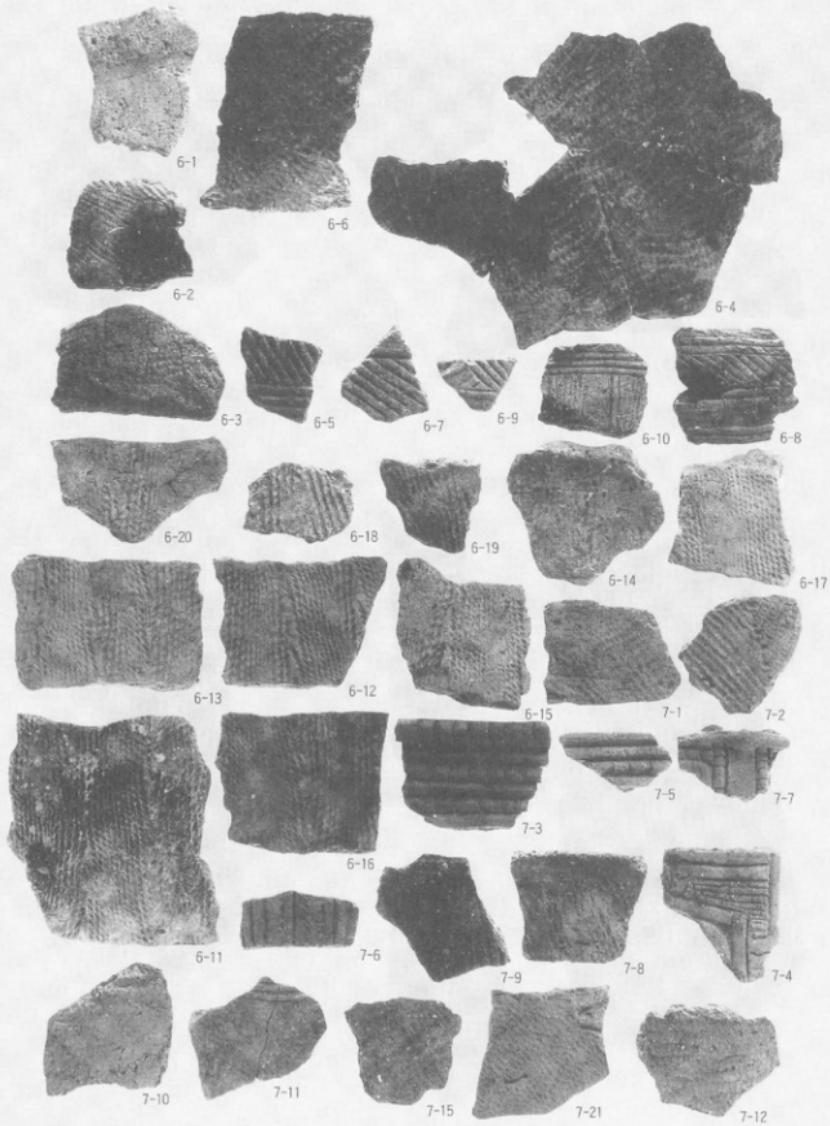


10

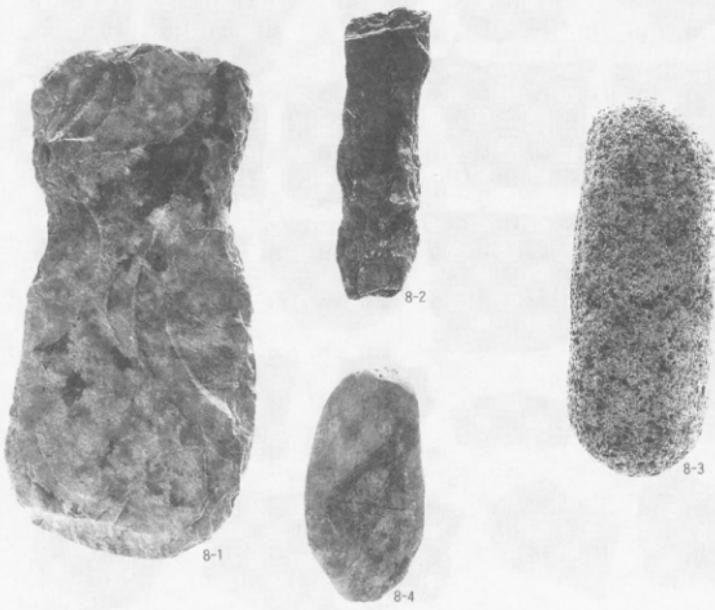
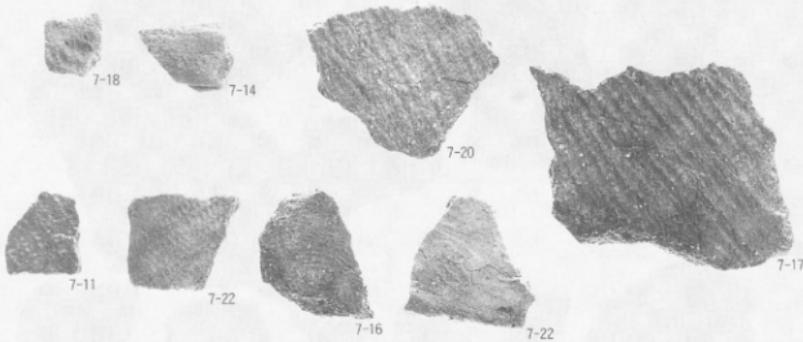
図版23 遺物写真 土師質皿(かわらけ) (図版5 参照)  
(縮尺2/3)



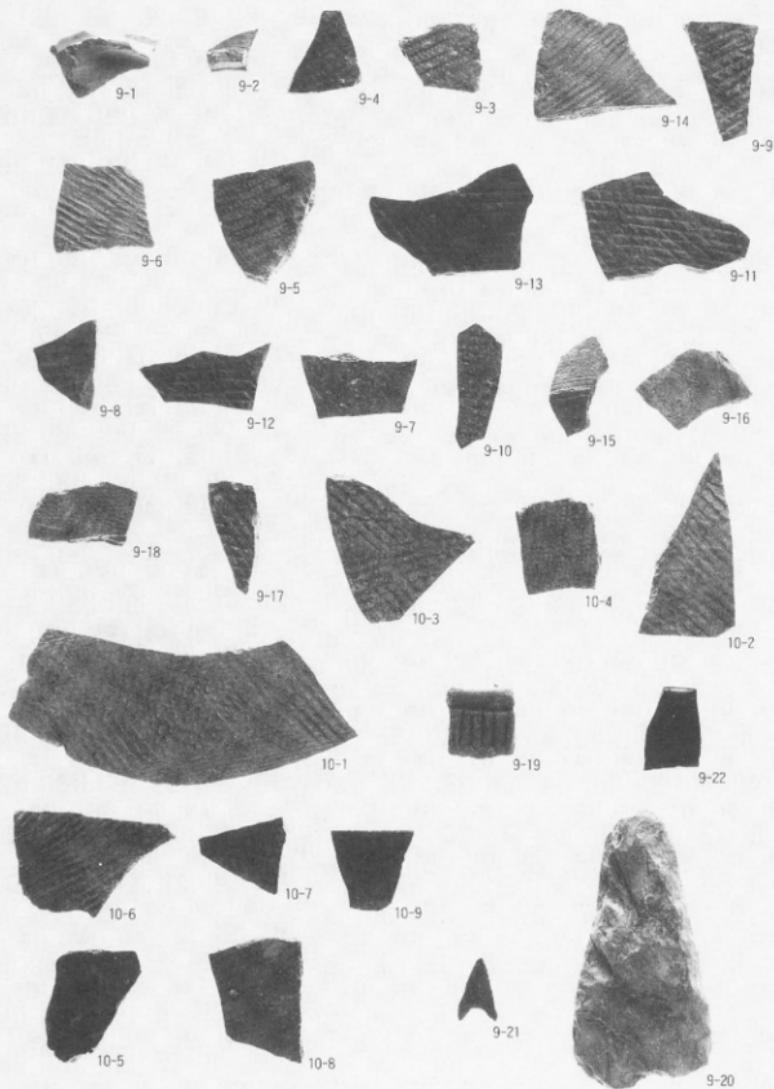
図版24 遺物写真 珠洲焼・土師質皿(かわらけ)・土師器・須恵器(図版3, 4, 5参照)  
(縮尺1/2)



図版25 遺物写真 縄文土器 (図版6, 7参照) (縮尺1/2)



図版26 遺物写真 純文土器・石器 (図版7, 8参照) (縮尺1/2)



図版27 遺物写真 繩文土器・石器、須恵器、土師器（図版9,10参照）（縮尺1/2）



## IV 調査結果

### 2. 平成8年度の調査

(1) 黒川上山古墓群の調査	79
(2) 調査の成果の整理	87
(3) まとめ	90
引用・参考文献	93

### 挿図・図版等目次

第1図 墓群全図	94	図版1 黒川上山古墓群周辺航空写真	106
第2図 遺構実測図(20~24・32・43号)	96	図版2 遺物実測図(42・45・55号)	108
第3図 遺構実測図(25~31・33~36・39~42・47~48号)	98	図版3 遺物実測図(31・34・36・44・55・60号)	109
第4図 遺構実測図(37・38・44~47・49~60号, 南側テラス)	100	図版4 遺物実測図(33・37・44・53・54・67号)	110
第5図 60号墓五輪塔下埋葬遺構実測図	102	図版5 遺物実測図(34・41・48号)	111
第6図 遺構実測図(61~67号)	104	図版6 遺物実測図(南側テラス)	112
		図版7 遺物実測図(60分・南側テラス)	113
第1表 墳丘墓の形態別比較	88	図版8~16 遺構写真	114~122
第2表 墳丘墓・集石墓・塔墓一覧	81	図版17~21 遺物写真	123~127

# (1) 黒川上山古墓群の調査

## 1. 遺構 (第1~6図、図版8~16)

調査により検出した遺構は、12世紀後半から15世紀はじめの平安時代末・鎌倉時代・南北朝期・室町時代に属するものである。1次調査で見られた鷹文時代の遺構は今回の調査区からは検出されない。

遺構が検出されるのは標高約67mから64mの舌状の丘陵端部の斜面上である。今回の調査区は、墓群のほぼ中央部、標高約67mの等高線上に設けられた約1mの段差の南側である。遺構全体は、野生動植物の影響で表面が若干削られた部分があるものの、ほとんど手付かずのまま残存しており1次調査同様、極めて良好な残存状況を示している。

検出した遺構は、墳丘墓（石組みを持つものとないものがあるが墳丘をもつものをこの名称で呼ぶ。）22基、集石墓10基、土壘状の土盛りの上に石組墓を築くもの8基、集石遺構1ヶ所、五輪塔を墓標とするもの（墳丘・石組みはない）2ヶ所で、土壘墓らしき遺構は検出されなかった。葬法もほとんど全てが火葬と考えられ、土葬は本調査区では確認されなかった。

### 墳丘墓 (第1~4・6図、図版9~13・15・16)

墳丘墓には平面形が方形のもの（17基）、長方形のもの（2基）で1次調査で見られた梢円や不整円のものは見あたらない。墳丘墓のすべてに何らかの石組みが施されており、平面形同様の方形を基本とする造営が行なわれている。また、墳丘と墳丘をつなぐようにあるいは、円形の集石を方形に取り囲むように築かれた土壘状の高まりが巡らされる部分があり、その上に石組みを行い埋葬されるもの8基もある。

**20号墓** (第2図) X79185~79188、Y21375~21377に位置する。この墓群の中央部西側にある。平面形は方形で、1辺が約3m、墳頂の高さは、約50cmと比較的小さな規模のものである。墳丘裾に縁石の名残と考えられる礫が残っている。墳頂部に焼骨片が観察されるが遺物は伴ってはいない。主軸は墳頂でN50°Wを測り1・8・16・17号墓と軸方向が似似し、同一の群と考えられる。

### 25号墓から29号墓

丘陵の尾根上に連続して築かれたもので、同族墓あるいは家族墓としてとらえられる。  
**25号墓・26号墓・27号墓** (第3図、図版9・10) X79178~79182、Y21380~21383に位置する。同一軸線上の一帯北側から順に番号を付した。この3基は、同一区画内に盛土されているものと見られ、隣り合う部分にわずかな溝や縁石を行い区画する。平面形は、墳丘裾で、3m×2.34m、3m×2.24m、2.58m×2.40mの方形を呈し、規模は、墳頂で25号墓が1.62m×1.42m、26号墓が1.62m×1.13m、27号墓が1.52m×1.44mとほぼ方形に近い。高さは標高で約67.88m前後ではほぼ一定である。墳丘裾からは43cm、47cm、46cmと比較的低いようだが、43号墓と64号墓の間の墓道と考えられる部分からは、比高差約3mでかなり高く感じられる。墳丘は、土を盛り上げた土饅頭のようであるが、掘り拳から人頭大までの石をかなり多く中に詰めて構築されており、しっかりと構築がなされている。墳頂に主体部は検出されなかった。一部、基底部まで掘削したところ、炭化物と灰、被熱した礫を検出したが、埋葬骨は確認できなかった。造墓の順番は、26・27・25号墓の順と推定される。主軸はいずれもほぼN80°Eを測り、墓の正面は、墳丘東側と見られる。

**28号墓・29号墓** (第3図、図版9・10) X79173~79177、Y21381~21385に位置する。先の25~27号墓と同一軸線上にあるが、27号墓との間にやや深く溝が設けてあり、区画を意識したものと考えた。この意味でこの墓は双墓（夫婦墓？）の可能性がある。平面形は、墳丘裾で、28号墓が2.74m×1.84m、29号墓が3.64m×2.76mの長方形を呈し、規模は、墳頂でそれぞれ1.78m×1.4m、1.02m×0.78mを測る。両墳丘間の溝は25~27号墓のそれと比べるとやや深いが、明確な区画ではない。墳頂部に石組みを施すが、主体部は検出されない。盛土は、25~27号墓と同様、盛土に礫を混入させているが、さらに礫の割合が高く、28号墓などは積み石墓と言ってもよく、調査前の状態でも、墳丘に礫

が観察された。基底部からは、炭化物と灰、被熱した砾を検出したが、埋葬骨は確認できなかった。検出状況から、28・29号墓の順と考えた。墳頂での標高は67.88m前後で、25～29号墓までは一定である。主軸方向はN88°-E、N87°-Eで、墓の正面も東側と見られ、25～27号墓と似ている。この2基の両側に、約1mの比高差で低く、造墓区画と考えられる47がある。集石墓と見られる若干の石組みが見られるが、主要な部分をはずして、遠慮がちにつくられている。

**30号墓～33号墓**（第1～3図、図版9・10） X79173～79188、Y21381～21387に位置する。25～29号墓までの墓列の東側直下に比高差約60cmに築かれている墓列である。30号墓が29号墓からこの墓列に降りてくる斜面上に築かれている感があるが、他の31・33号墓は、25～29号墓下の段上の同一平面に築かれている。32号墓は、31号墓の北側に独立して築かれるが、同一の軸線上にあり、また、25号墓から土壘状の高まりが作りつけられており、一体感が感じられる。平面形は方形で、30・33号墓土がなく、それぞれ1.5m×1.5m、2.14m×2.12mの規模をもつ。31号墓は、墳丘墓で、幅2.88m×2.6m、墳頂部で1.52m×1.5mを測る。ほぼ中央に深さ28cmの穴を穿ち、八尾焼を藏骨器とした主体部を設けている。遺物から13世紀末ないし14世紀初頭の墓と推定される。32号墓は、墳丘墓で規模は、幅4.9m×4.6m、墳頂で3.24m×3.2m、幅からの高さ0.39mの方形のものである。これもまた石組みが施されている。

**34号墓～42号墓**（第1・3・4図、図版9・10・16） X79169～79183、Y21387～21394までの範囲に位置する。48号の円形の集石を取り廻み、44号墓の東辺に接する土壘状の高まりに築かれている石組みの墓である。ドル井上に構築することで、盛土を持つものと同様な効果を求めたものと考えられた。今回調査では8ヵ所の埋葬施設しか確認していないが、この土壘上にはまだ埋葬施設があるものと考えられる。以下埋葬施設ごとに概要を述べる。

**34号墓**（第3図、図版9・10） X79176～79178、Y21387～21388に位置する。集石の平面形は1.36m×0.89mの長方形である。主軸はN89°-Wを測る。48号の円形集石の西にあり、25～29号墓の段、31・33号墓の段とこの34号墓のある段は、南北にはほぼ並行に階段状に構築されており、48から見ると祭壇のような景観である。集石上に地輪とみられる1辺15cm程度の砂岩質の石が確認される。

**35号墓**（第3図、図版9・10） X79175～79176、Y21389～21391に位置する。34号墓とほぼ直角になる位置で48号墓の南側に位置する。規模は、2m×1.46mで、軸方向は、N5°-Wである。平面形は、長方形で、縁石が丁寧に巡らされている。

**36号墓**（第3図、図版9・10・16） X79173～79175、Y21392～21393に位置する。35号墓の南東にあり、墓域南東から延びる墓道に面して占地する。規模は、1.58m×1.32mで平面形は方形である。軸方向は、N79°-Eである。墓の北側に珠洲焼の藏骨器を検出した。上部が一部分欠落しているが、ほぼ原型をとどめている。木根により上部の蓋が失われており焼骨は器の2/3程度を残すのみである。遺物から13世紀後半の墓と考えた。

**37号墓**（第4図、図版10） X79171～79173、Y21392～21394に位置する。36号墓の南隣にあり、44号墓と西で接する。規模は、1.64m×1.36mで平面形は長方形である。軸方向は、N74°-Eで36号墓に並ぶ。

**38号墓**（第4図、図版10） X79169～79171、Y21392～21394に位置する。37号墓の南隣にあり、44号墓と西で接する。規模は、1.64m×1.48mで平面形は方形である。軸方向はN76°-Eで36・37号墓に並ぶ。土壘はここで途切れ、墓の南側に石組みが設けられている。38号墓の追善施設ではないかと考える。37・38号墓は、44号墓と西で接するが、切り合いかから、これらの墓の乗る土壘は44号墓の後に築かれており、44号墓の東側墳丘は、この土壘により覆われている。

**39号墓**（第3図、図版9） X79179～79180、Y21392～21393に位置する。36号墓の北にあり、48号集石を取り廻む土壘端に造営されている。この墓の東に墓道が走り、土壘の開口部が36号墓との間にあり、48号集石への入り口となっている。規模は、1.30m×1.08mで平面形は方形で、比較的丁寧な石組みが施されている。軸方向は、N86°-Eで

土壙に平行である。墓道との比高差は、約1mである。

**40号墓**（第3図、図版9） X79181～79183、Y21391～21392に位置する。48号集石の北東で、43号墓の南の土壙上にある。土壙はここで南に屈曲する。規模は、1.30m×1.08mで平面形は方形で、39号墓と同規模である。軸方向はN4°～Wで、39号墓と直角の位置で墓の正面は、北側と考えた。石組みは、方形の縁石を残すが、39号墓より約50cmほど高い位置にあり裾に若干の石列を残す。

**41号墓**（第3図、図版9） X79181～79183、Y21388～21389に位置する。48号集石の北西にあり、40号墓から、約5m西にある。石組みが施され、規模は0.86m×0.7mで平面形は方形であるが、軸方向が、N39°～Wと土壙と平行ではなく、また中心を外れて築造されている。土壙上の他の墓とは異質であり、やや後出のものと考える。

**42号墓**（第3図、図版16） X79182～79183、Y21387～21388に位置する。土壙をはずれた、32号墓と41号墓のやや低い平坦面に築かれている。規模は0.88m×0.82mで平面形は方形で石組みの跡をのこす。ほぼ中央に径約30cmの穴に蔵骨器を埋納する。蔵骨器の蓋はなく焼骨に土が混入している。遺物から13世紀末の築造と考える。

**43号墓～46号墓**（第1・2・4図、図版9・10・11・15） X79165～79188、Y21376～21393まで広い範囲に分布する。これは、43号墓が離れて造営されているためであるが、墓の形状や、軸方向からまとまりを見いたした。

**43号墓**（第2図、図版15） X79184～79188、Y21389～21394に位置する。方形の墳丘墓で48号集石を中心とする墓群の北に作られており、独立した感がある。しかし、全体を見ると後述する44号墓～46号墓に、主軸が一致しておりこれらの墓とのまとまりが考えられる。規模は、裾で4.72m×4.14m、墳頂で2.38m×1.82m、裾からの高さ0.8mで、墳頂の狭いものである。東側に墓道が走り、裾の一部分が削られた感がある。当墓群成立初期のものと考える。なお主軸はN13°～Wで、墓の正面は、北側と考えた。

**44号墓**（第4図、図版10・11） X79168～79173、Y21388～21393に位置する。土壙上の集石墓37・38の西に近接して存立し、東側の裾は土壙により完全に覆われている。規模は、裾で4.94m×5.1m（復元値）、墳頂で3.2m×3.2m、裾からの高さ0.45mの方形の墳丘墓である。墳頂部が広く標高66.3mでは一定の平坦面を作り出している。そのほぼ中央に1.25m×1.34mの方形の集石が見られる。なお主軸はN10°～Wで、墓の正面は南側と考えた。

**45号墓**（第4図、図版10・11） X79164～79171、Y21388～21393に位置する。44号墓の西側に大きく、ひときわ高く作られている。平面形は方形で、規模は、裾で4.72m×4.14m、墳頂で2.38m×1.82m、裾からの高さ1.1mと他を圧倒している。主軸方向はN15°～Wで、墓の正面は、南側と考えた。墳頂部に若干の石組みが見られるが、今回調査した墳丘墓の中では比較的少ない。この墓と25～29号墓を、つなぐ軸線上に主軸はややずれるが、本墓群最高所の1号墓がある。墓群全体の地形を観察すると、この軸に本丘陵の尾根があることがわかる。45号墓は、その尾根筋の南端に築かれしており、その存在は川の流れる谷からも見通せる。墳頂上に主体部は検出されないが、その中央をやや南にはずした基底部上に蔵骨器を埋納している。蔵骨器は、白磁の四耳壺を使い壺口縁を打ち欠いて、その上に土師質の皿2枚を重ね合わせて蓋としている。基底部までは、墳頂から1.12mで底面に焦土と被熱した疊、灰などが観察される。造営は、出土した蔵骨器・土師質皿から12世紀後半と考えられ、本墓群のもっとも早い時期の墓であることが確認された。

**49・50号墓**（第1・4図） X79169～79173、Y21397～21400に位置する。同一の長方形の墳丘上に築かれており、37・38号墓がのる土壙の西に位置し、規模は、墳丘裾が、5.18m×2.40m、墳頂は49号墓が、1.12m×1.1m、50号墓が、1.04m×1mで裾からの高さはともに0.31mと同一である。墳頂の平面形はともに方形である。軸方向はそれぞれN85°～E・N86°～Eと一定である。規模・軸方向などから双墓の可能性が高い。37・38号墓からの比高差は、約1.1m低くさらに約1m下に墓道が走る。墳丘の南側には1.1m×1.75mの縁石があり、祭儀空間と考える。

**51号墓**（第1・4図、図版12） X79164～79167、Y21390～21393に位置する。44号墓の南側にあり、墓域最南端に

あり約3.2m下に丘陵を一部分削って作られたテラスがある。塔墓である60号墓がその直下に造営されている。

規模は墳丘裾が、3m×2.46m、墳頂は、1.62m×1.54mで高さは0.45mを測る。平面形は方形である。主軸はN4° -Wで44号墓を意識しているようである。テラスと墳頂の比高差は約2.7mで、下から見上げるとかなり大きく感じる。

**55号墓**（第1・4図、図版12） X79157～79159、Y21381～21383に位置する。墓群南西端にあり、南側直下にテラスを見下ろす。墳丘の跡はないが丘陵端の崖を裾として構築されており谷から見て墳丘状を呈することを意識した占地が行なわれているところから墳丘墓として取り扱う。規模は2.12m×1.8m、高さはテラスから1.72mでかなりの高さを感じる。平面形は方形で、主軸はN1° -Eを測る。墓中央に径約34cm深さ30cmの穴が穿たれ、珠洲焼を藏骨器とした埋葬が行なわれている。残念ながら木根により藏骨器は破壊され、焼骨は散乱しており回収できなかったが、本体の90%は残っており蓋として利用された擂鉢片も回収できた。この遺物から珠洲Ⅳ期初頭（13世紀末～14世紀初頭）のもので遺構もその時期に比定されるものと考えた。

**61号墓～64号墓**（第1・6図、図版10） X79180～79196、Y21396～21403の範囲に位置する。墓道の東側にある小尾根上に北から南に配列された一群である。

**61号墓**（第6図、図版10） X79194～79196、Y21396～21399に位置する。墓道を挟んで9号墓の西に祭かれている。規模は墳丘裾が、3.26m×3.04m、墳頂は、1.8m×1.56mで高さは0.48mを測る。平面形は墳頂が方形である。主軸はN89° -Eである。石組みは墳頂部分に石組みが施されている。

**62号墓**（第6図、図版10） X79192～79194、Y21396～21319に位置する。61号墓の南隣にあり石組み以外に明確な掘込みなど区画性がないことから、61号墓と双墓になるものと考える。規模は、墳丘裾が、3.32m×2.64m、墳頂は、1.48m×1.3mで高さは0.3mを測る。平面形は墳頂が方形である。主軸はN79° -Eで、61号墓と似かよっている。また、石組みも61号墓同様に墳頂のみに施されており類似性を感じる。

**63号墓**（第6図、図版10） X79186～79191、Y21398～21400に位置する。43号墓の東に墓道を挟んで占地する。墳丘の北東が1/3程度が後世の擾乱により失われているが、規模は墳丘裾が、4.74m×4.68m、墳頂は、2.58m×1.84mで高さは1.17m、平面形は方形と復元できる。主軸はN70° -Eである。規模から43号墓との類似性を感じるが、石組みが顕著でないこと、輪方向が1次調査の1号墓に近いことなどからこの墓群の初期の頃の造営を考える。

**64号墓**（第6図、図版15） X79180～79184、Y21400～21403に位置する。63号墓の南、39・40号墓の乗る土堤の東側に墓道を挟んで占地する。規模は墳丘裾が、3.74m×3.28m、墳頂は、1.72m×0.98mで高さは0.58mを測る。平面形は墳丘裾が方形で墳頂が長方形である。主軸はN85° -Eである。墓の正面は西側で、墓道に面している。裾のさらに外側には、5.03m×6.1mの方形の石列が認められる。

**65号墓～67号墓**（第1・6図、図版13） X79173～79176、Y21402～21407までの範囲に位置する。墓域南東隅から北西に入り込む墓道の右側に平行に並ぶ墓群である。墳丘は、この位置に土堤状に積まれた盛土を利用しており裾を明確にする意識はないものと考えた。いずれの墓も正面は、北東側と考えた。

**65号墓**（第6図、図版13） X79175～79176、Y21402～21403に位置する。墓道を隔てて49号墓の北東にある。規模は墳頂で1.49m×1.17mで土堤裾からの高さは、約0.2mと低いが、墓道からは約0.7mと高い。平面形は墳頂が長方形で石組みが施されている。主軸はN36° -Eである。

**66号墓**（第6図、図版13） X79174～79175、Y21404～21406に位置する。65号墓の南東隣にあり規模は墳頂で1.52m×1.04mで土堤裾からの高さは、約0.2mと低いが、墓道からは約1.2mと高い。平面形が長方形で石組みなどの特徴は65号墓に似る。

**67号墓**（第6図、図版13） X79173～79174、Y21406～21407に位置する。66号墓の南東隣にあり規模は墳頂で1.10m×1.06mで土堤裾からの高さは、約0.2mと低いが、墓道からは約1.4mと高い。平面形は方形で他の2例とは異なる

るが石組みなどの特徴は65・66号墓に似る。

**集石墓**（第1・2・4図、図版12）

集石墓は10基を確認した。いずれも平坦面に敷石したもので、石だけを積み上げて構築したものは検出されなかつた。以下、墓ごとに詳細を述べる。

**21号墓・22号墓**（第2図） X79182～79185、Y21372～21378の範囲に位置する。雖然と敷石が密集するばかりに見えるが、人頭大の石が縁石として方形に組まれていることから埋葬施設と確認できた。20号墓の南西に2基並んで構築されている。規模は21号墓が0.98m×0.84m、22号墓が1m×0.84m、主軸方向もそれぞれN34°～E、N31°～Eとはほぼ同一方向であり、双墓と考えられる。

**23号墓・24号墓**（第2図、図版12） X79181～79184、Y21376～21379の範囲に位置する。25号墓・21号墓・22号墓の間に位置し、軸方向から、これもまた双墓と考えられる。規模は23号墓が1.1m×1.8m、24号墓が2.58m×1.68m、主軸方向もそれぞれN89°～W、N90°～Wとはほぼ同一方向である。やや、25号墓が大きく、両者の関係が夫婦墓的なものかもしれない。

**52号墓～54号墓**（第1・4図、図版12） X79162～79168、Y21380～21389の範囲に位置する。墳丘墓である45号墓の周辺に築かれたものである。

**52号墓**（第4図） X79166～79168、Y21387～21389に位置する。45号墓の南東裾に築かれており、規模は1.64m×1.35m、主軸方向はN47°～Wで、ほぼ方形の縁石が施されているが、石組みはそれほど顕著ではない。

**53号墓**（第4図、図版12） X79162～79164、Y21383～21384に位置する。45号墓の南西裾に54号墓と並んで築かれている。規模は1.54m×1.26m、主軸方向はN40°～Eで、ほぼ方形に近い。54号墓と双墓になる可能性がある。

**54号墓**（第4図、図版12） X79163～79165、Y21380～21382に位置する。53号墓の北西に並んで築かれており、双墓の可能性がある。規模は2.26m×1.58m、主軸方向はN39°～Eで、平面形は方形である。

**57号墓～59号墓**（第4図） X79165～79169、Y21372～21375の範囲に位置する。46号墓・47号造墓区画の西側の標高65.3m前後の狭隘な平坦面に築かれており崖模もかなり小さいものである。いずれの墓も石組みは顕著ではない。規模は、57号墓が1.02m×1m、58号墓が0.92m×0.86m、59号墓が0.9m×0.48m、軸方向は、それぞれN48°～E、N43°～E、N78°～Eと同一性が必ずしも顕著でない。しかしながら、集石の組み方や狭い平坦面を巧みに利用した造墓がなされており一群として取り扱いたい。

**塔墓**（第1・4・5図、図版12・14）

石組み及び墳丘もなく、五輪塔など石造物のみで埋葬されたものであり、第1次調査では検出されなかつた墓である。五輪塔の各部位は墓域南端のテラス上で散見されるが、このテラス上で1基、墓域丘陵上の南西隅で1基の計2基が検出された。しかしながら、丘陵上から転げ落ちたと見られるものもあり墳丘や、集石の上に五輪塔が造立したものもあった可能性がある。以下その2例について述べる。

**56号墓**（第4図、図版12） X79163、Y21377に位置する。台座、地輪が元位置を保ち傍らに水輪が検出された。台座は、45cm角で地輪は38cm角のものである。台座下は、未調査である。

**60号墓**（第4・5図、図版14） X79160～79163、Y21390～21395に位置する。左右一対の双墓で周辺3.34m×2.78mの範囲に縁石が巡らされていたものと思われる。台座は、左右とも44cm×44cmで、約30cmの間隔で並べられている。左側の正面には、ほとんど造作のない切石がおかれ。この台座を取り除くとその下に60cm×60cmの台座2個を半切して台座をおくための礎石として利用している。これも取り除くと砂層となり、左側に珠洲焼を藏骨器とした主体部が検出される。この砂層を取り除くと、砂層を一面に敷き詰め墓底部としている。右側の台座下には主体部はなくただ砂礫を敷き詰めるのみである。出土遺物は、この藏骨器と隕石とした台座の間から出土した土師質の皿がある。台

座・珠洲焼壺・土師質の年代から、14世紀末ないし15世紀初頭の埋葬と考えた。埋葬が左側のみである点から、右側のものは参り墓ともとれるが、立地から正面は南側と考えられ、後に埋葬施設として利用する意図があったものかもしだれない。

#### 造墓区画・円形集石（第1・3図、図版9・12・15）

特殊な遺構として47号の造墓区画と48号の円形集石がある。いずれも埋葬施設を持たず、墓群の中で特殊な遺構といえる。

47号造墓区画（第3図、図版12） X79169～79177、Y21373～21380に位置する。盛土したと言うよりは、丘陵の一部を削りだして作られた平坦面である。規模は幅で7.94m×5.96m、平坦面上場で6.54m×4.52mとかなり広い。28・29号墓の西にあり46号墓とはほぼ同一の軸線上に占地する。丘陵の斜面となる西側を除き周囲に溝を持ち、この一角を区画している。標高は、約67mで一定で46号墓との比高差は約60cmである。北側に集石、西側縁辺に石列が残るが、埋葬施設としてはおらず、区画だけが残っている。この付近の墳丘墓は、当初このような区画を設け、計画的に順次構築されたものと見られる。また、これだけ広い開休地が残されたままで、他の狭隘な場所に埋葬施設が集まるところから、この区画にはある程度の地位のものが埋葬されるべき地として残されたものと考えられ本墓群を考える上で、重要な遺構といえる。

48号円形集石（第3図、図版15） X79177～79180、Y21389～21391に位置する。34・35・39～41号墓が乗る上塁に開まれた中央の墓地に作られている。集石は、長径2.5m、短径2.12mのやや不整形の円で人頭大の石によって形作られている。東側に墓道があり、それに面する部分の土壘が途切れしており、この集石への入り口となっている。この入り口から西側を見ると25～34号墓までの墓群があたかも祭壇のように配列されていることが解る。集石の約1/2を取り払うと形約1.6m深さ約60cmの堀込が検出できたが、内容物はなく性格については不明である。しかしながらその立地から地上に墳墓室あるいは石塔などが建立されていた可能性が考えられ、本墓群の性格を考える上で貴重な遺構といえる。

## 2. 遺物（図版2～7、図版17～21）

出土遺物は、白磁・土師質の皿（かわらけ）、珠洲焼の壺・甕・擂鉢・鉢、五輪塔の各部位などが出土地。1次調査日で付いた縄文土器は1点も出土していない。出土遺物のほとんどは墳丘墓に伴う出土品で、残存状況も比較的によいものが多い。以下図版ごとにその特徴を述べる。

白磁・土師質の皿（かわらけ）（図版2・3・17・19） 図版2の1～3は、いずれも45号墓からの出土遺物で歳骨器あるいはその蓋として用いられていた物である。3の白磁の四耳壺に土師質の皿1・2が2枚重ね合させて振せられていた。1・2は口径がそれぞれ14.4cmと14cmのいわゆる非ロクロ系の土師質の皿である。底径は1が、9.5cm、2が9cmとやや1が大きく出土した際も1が上に覆い被っていた。両者とも丸みを持った底部からや立ち上がる口縁部に2段のヨコナデが施されたものである。全体にやや厚手で口唇部に丁寧な面取りが行なわれている。底面に調整のための指痕压痕をとどめている。色調は、黄褐色を呈する。全体の特徴から、12世紀後半の遺物と考えるが、北陸においてこの時期の土師質の皿は開発領土クラスのごく限られた遺跡からの出土例しかなく、京都系のものと酷似する。中世の墓群からの出土例であることも含めて興味深い。3は、白磁の四耳壺である。内部に焼骨がいっぱいに納められていた。頸部・口縁部を打ち欠いて蓋骨器として使用している。器高は残存部で23.4cm（推定器高約25cm）、口径約12cm、底部高台径は8cmである。器形は、幅広な大づくりな耳を持ち、その上下に横走する段を有する物で、胴部はなで肩よりさらに丸みを帯びている。高台は浅く底部・高台外縁の境が不明瞭である。胴部は、ケズリ調整痕を残しやや角張った印象を与える。胎土は灰白色で粉っぽい感じで粗く、釉は薄く、黄味がかった乳白色を呈する。以上の特徴から、

この四耳壺も12世紀後半に流通したものと考えられ、上師質の壺の年代観に一致する。のことから、45号墓は12世紀後半の造墓と考えられ、本墓群中もっとも古い墓の一つといえる。

図版3の4~6は、60号墓の五輪塔台座横から出土した。いずれも口径8cmの土師質の壺である。非クロコ系で、底面がまるく、口縁端部が丸く収まる。色調は乳白色を呈し、ほぼ同じ作りのものである。6に煤が付着しており灯明皿として使用されたものと見られる。15世紀前半のものと考えた。

**珠洲焼**（図版2~5・17・18・20・21） 図版2の4・5は55号墓から、6は42号墓から出土した。4は、擂鉢である。底部が尖れており、口縁も全体の1/2を残すのみである。内面に櫛歯具を使用したオロシ目が見られるが、長さは一定ではない。口縁端部が、外反し面を作る。器体は直線的に立ち上がり、口縁でやや外反する。珠洲焼の編年の中期初頭の特徴を持つ。復元口径約30cm、器高約12cmの物と考える。5は、壺である。木根による搅乱で破損した状態で出土したため、焼骨は残っていなかった。しかし、壺は復元ではほぼ全体が残っている。口径18cm、器高36.9cm、胴径30.3cm、底部径10.2cmのものである。やや肩のはった倒卵形の器体に広口の口縁をつけた物で胎土は緻密である。焼成は良好であるが、一部に融着した粘土が見られる。器面底部を除いてほぼ全体にやや右肩下がりの叩き目が施されている。叩き目は溝の深い原体を強く叩きしめ、反時計回りに1列おきにつけられている。頸部のやや下に竹管による刻文が等間隔に4ヶ所施されており、さらにその斜め右下に馬蹄形の文とともに粘土帯を取り付けた跡ともとれるものが、やはり4ヶ所見受けられる。内面には全体の4/5まで1列おきに当て具痕が見られ、内底面に辘轳ナデ痕が残っている。器面全体は、灰褐色を呈する。頸部は外反して立ち上がり、口縁部は曲を持ってやや丸くひらく。13世紀末ないし14世紀初頭の珠洲中期のものと考えた。

6は、42号墓から出土した遺物である。完全な形で主体部から出土した。内部には、焼骨が全体の2/3納められているが、蓋がなく上がかなりの量含まれる。口径10.8cm、器高19cm、胴径18.6cm、底径9.3cmの小型の壺である。器形は口縁が外反し、怒り肩のまま底部にすぼまる。器体頸部に櫛目衝突工具による5単位の弧文、上胴部に同一工具を用いた綾やかな波状文が施されている。口縁部は、くの字状に外反して立ち上がり端部に平面を作り出す。口縁端部は、非常に鋭く整形され器形全体の印象を引き締めている。灰褐色を呈し成形、焼成とも良好な製品である。珠洲Ⅲ期後半（13世紀後半から末）の物と考える。

図版3の1は、36号墓主体部から出土した。藏骨器として使用された壺で、内部に1/2程度焼骨が納められていた。蓋は、木根により失われている。口径15.5cm、器高34.5cm、胴径28.5cm、底径9cmのものである。この壺の最大の特徴は、器面全体に施された装飾である。口縁内外面には、櫛歯状工具による波状文、頸部から胴上部は、範などを用いた波目の模様を8条その下に1条「し」の字状の模様を連続させたものを横走させ、胴部には、櫛歯状工具を波状に7条横走させて施している。底部には、右下がりの叩き目が残っている。内面全体に当て具痕を残すことから、器面全体を一度叩き締めその後、スリ消してこのような文様を施したものと考える。このような文様の装飾壺は初例と考える。器形は、やや肩をはった上胴部から底部がすぼまる倒卵形の器体にやや小さい口縁をつけており、頸部から口縁にかけて外反する。全体の特徴から珠洲Ⅲ期の中頃、13世紀後半のものと考えるが、器形からもう少し古い物かもしれない。

3は、五輪塔の立つ60号墓から出土した。丸胴に膨らむ体部に外反気味の玉ぶちの口縁をつけたもので、全体の印象は安定感がある。口径10.3cm、器高23.5cm、胴径21.4cm、底径10.8cmの小型のもので、胎土はやや粗いが、焼成は良好で全体に灰褐色を呈する。珠洲Ⅴ期のものと考えるが玉ぶち状の口唇部から他の焼き物の影響が考えられる。

11・12・図版5の1~6・10~12は、34号墓周辺の土壠上で出土した。11は壺口縁の破片である。くの字状に外反するもので端部外側が外へ張り出している。12は口径の小さい壺の口縁である。口縁端部に櫛歯状工具による波状文が施されている。図版5の1~6・10~12は、綾杉状の叩き目が残る破片で胎土・調整などから同一個体と考える。これ

らは珠洲Ⅲ期に位置づけられるものと考える。

図版3の7・8、図版4の7~9は44・38号周辺で採集された擂鉢・鉢・壺などである。図版3の7、図版4の7・8は鉢である。いずれも小ぶりで、底部から口縁端部にかけてやや内湾しつつ立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びているものの、面を取る意図が感じられる。静止系切り痕を外底面に残すが、一部ナデによりすり消されている。珠洲の編年のⅢ期のものと考えられる。図版4の8は、小型の壺である。やや肩の張った器体を持つものでこれもⅢ期に比定したい。図版3の9・10は、擂鉢である。口縁部がやや肥厚し、端部に面を取る。内面にオロシ目をとどめており、前記の鉢類よりやや古手のものと考える。図版4の1は67号墓付近で採集した。底部から、口縁にかけて膨らみを持って立ち上がり、口縁部がやや外反する。端部は丸みを帯びるが、面を取る意識が明瞭である。内面にやや目の粗い桶削具を用いたオロシ目が、2条残る。珠洲Ⅱ期のものと考える。図版4の2~6は54号墓周辺の遺物である。2の擂鉢、5・6の叩き目の特徴から珠洲Ⅲ期のものと考えた。

**八尾焼**（図版2・18）　図版3の2は、八尾焼である。31号墓主体部より出土したもので、今のところ本墓群で唯一出土した物である。器形は壺で焼成は悪く、全体に焼きぶくれの状態でありまた口縁が失われている。外面全体に茶褐色の釉が施されている。器形は、肩の張った上部から底部にすばまる器体に外反する口縁を取り付けたもので、頸部に接合痕と思われる1条の段が残っている。13世紀末なし14世紀初頭の製品と考えた。

**石造物**（図版6・7・18・19）　出土した石造物は板碑が1点だけで、その他はほとんどが五輪塔で占められている。出土場所は、墓群南端の丘陵端部もしくは丘陵の一部を削り取って作られたテラス部分である。出土点数は、空風輪1・火輪4・水輪3・地輪2・台座6・板碑1の計17点である。出土状態は、元位置を保つものが56号墓の地輪（図版12の4）と60号墓の台座（図版14の1~3）で他はテラス上部の斜面などにこぼれ落ちた状態で出土している。形状から見た年代は、いずれも14世紀末から15世紀にかけてのものと見られ、本墓群の最終段階の造立と考えられる。本書では、56号墓のものを除いて図示した。

図版6の1は、空風輪である。空・風一体型の成形で、空輪部が大きく、風輪部が小さく薄い。高さ24cm、最大径は、空輪部14.4cm、風輪部13.6cmである。石質は硬質砂岩でやや粗い成形である。図版6の2~5は、火輪である。石質はいずれも凝灰岩と考える。大きさは、高さ16~18cm、幅24cm~26cmの2・5、高さ28cm~25.6cm、幅35.2cm~33.6cmの3・4がある。前者は、峰の低い15世紀代、後者は峰の高い14世紀代のものと考えられやや大型の五輪塔が想起される。図版6の6・7、図版7の1は水輪である。このうち図版7の1は、下部が失われており詳細は不明である。図版6の6・7は、いずれも中央に梵字が刻まれる。彫りは深いが、精緻なものとは言い難い。字の形状は若干違うが、おそらく同一のもので「曼」と刻したものである。大きさは6が高さ16cm、最大径25.6cm、7が高さ20.4cm、最大径27.6cmで6が上下の平坦面がややくびれ、7は肩の張ったものである。8は板碑である。硬質砂岩の自然石の一部を加工して成形した粗製のものである。一方に突起を設け平坦に削った正面の上方に「曼」の梵字を刻する。彫りは深くなく精緻なものとは言い難い。大きさは高さ44cm、最大幅22cm、厚さ16.4cmである。

9は60号墓正面に伏せて安置されていた切石で、元は地輪であったものかもしれない。後述する台座礎石と同様の使用目的で使われたものと考える。図版7の2~7は全て60号墓の五輪塔の台座である。このうち4~7は、台座を半切し、2・3の台座の礎石として転用したものである。4・5が組合わさりその上に2が乗り、6・7が組合わさりその上に3が乗る。2は1辺が44.8cm、厚さ11.2cmで黄灰色を呈する砂岩で作られている。蓮弁はかなり摩滅が激しいが、複弁の半花座が1辺に2葉残る。上面に加工痕が残る粗製のものである。3は1辺が44cm、厚さ10.4cmで黄灰色を呈する砂岩で作られており、2にはほぼ同じ大きさのものである。これもまた摩滅が激しく、蓮弁はかなり摩滅しているが、2同様の加工が施されている。4~7は礎石として転用されたもので、本来4・6、5・7が同一個体であったが、それを半切し組違いに礎石として使用している。60号墓のあるテラスが、傾斜しているところから、露出する前面を同一の石材で

統一使用したものと考える。石材は4・6が灰白色の砂岩、5・7が2・3同様の黄灰色を呈する砂岩で作られている。大きさは4・6が<sup>1</sup>辺57.6cm、5・7が<sup>1</sup>辺58cmのもので、摩滅が激しく蓮弁は見られない。

## (2) 調査の成果の整理

今回の調査で確認された墓は、46基、造墓区画1、円形集石1で、前回1次調査で21基の墓と集石1ヶ所を検出しており、合計で67基の墓、3箇所の埋葬に関わる施設を確認した。しかし、時間的制約から今回の調査では墓群全体の検出と実測図の作成に主眼をおいたため、土壘状の土盛りに埋葬された蔵骨器など掘り残した部分が未だに存在し、現時点で全体を整理し報告するには困難な部分が多くある。そこで、1次調査の成果をふまえつつ、今回の調査により得られた成果をまとめることとし、全体の報告は、平成12年に刊行予定の本報告に委ねることにしたい。

### 1. 墓の分類

前回1次調査で墓域を構成する墓の形態について墳丘を持つ物、土壘墓、集石と区分したが、今回の調査で土壘状の高まりに埋葬される例、五輪塔だけを墓標とする例が確実に存在することが明らかとなった。あらためて、本墓群を構成する墓の形態をまとめると1. 墳丘墓38基（単独に盛土を持つ物全てをこれにまとめる。）、2. 集石墓11基（盛土を持たず石組みだけの墓）、3. 土壘墓2基、4. 土壘上墓14基（土壘状に埋葬された墓）、5. 塔墓2基（五輪塔などの墓標のみの墓）の5種類に大別できる。これら全ての埋葬跡を確認したわけではないが、各墓の代表的なものの埋葬跡から墓の種類とその埋葬年代に違いを見いだすことができそうである。しかしながら、現段階でその作業に移るには不確定な要素が多すぎそのため、墓の種類ごとにできうる限りの分類を行い今後の調査の指針としたい。

#### 墳丘墓の分類について

1次調査で試みた墳丘墓の分類を再度行なってみたい。分類は前回の基準に準じて次のように分類した。

- A 類 遺体を土坑に単数埋葬したもの。
- B 類 火葬骨を小型の土坑や円形の小穴を掘り、その中に埋葬している。中には、木箱などに入れて埋葬した可能性もある。
- B' 類 火葬骨を複数の土坑に埋葬したもの。埋葬方法はB類と同じである。
- C 類 火葬骨を蔵骨器に入れ、埋葬するもの。（各種の焼き物を含む）
- D 類 火葬骨をその灰とともに墳丘基底面におき、盛土をして埋葬したもの。火葬跡は検出されない。
- E 類 埋葬や火葬の跡がまったく認められない。

また、形状の違いから、a. 方形（不整形形を含む）b. 長方形（不整長方形も含む）c. 円形（特円形も含む）d. その他、不整形でどれにも属し難いもの、あるいは不明のものの4種類に分けることができる。方形と長方形の違いは前回同様、見た目で方形のものとらえられる許容範囲、タテとヨコの比率が1:1.5以下とのものと規定した。このAからE類とaからdを組み合わせると第1表のようになる。

以上から、1次調査で方形火葬墓で火葬骨をそのまま埋葬する例が多いことを指摘していたが、蔵骨器に埋納する例も13ヶ所あり特筆される。しかしながら、土葬墓はその類例を増やすことはなく、墳丘墓の葬法上の特徴は方形または、長方形の墳丘に火葬されているものが23例で墳丘墓全体の約60%を占め、土葬は13%程度と少ないことが明らかとなった。

第1表 墳丘墓の形態別比較

	A類	B類	B'類	C類	D類	E類	計
a類	4	5	3	11	6		29
b類			1	2			3
c類	1				2		3
d類		1			1	1	3
計	5	6	4	13	9	1	38
葬法	土葬	火葬				不明	

### 集石墓について

今回の調査では、前回みられなかった集石墓が11基検出された。検出状態は、自然石が平面的に並べられただけの様にも見えるが、よく見ると人頭大の石が方形に並べられ、縁石となっている。なかでも21・22号墓と23・24号墓は一対の墓と考えられ双墓であると考えている。大型の方形埴丘墓45・46号墓周辺の52~54・57~59号墓についてもそうした傾向がみられる。

### 土壘上墓について

土壘状の高まりに集石して築かれた墓を総称して呼ぶが、1次調査の2~2号墓・今回検出した65~67号墓のように周溝や墓道の構築の際に積み上げた盛土を利用した感のもの以外に、34~41号墓のように集石を取り囲み埴丘を結ぶ意図で構築された墓が検出された。これらは25~31・33号墓、48の円形集石と相まって墓道からみると祭壇のような景観を作り出しており、これらが時代的に連続して計画的に配置された群であることが解る。本墓群の一二期となると考える。

### 塔墓について

埴丘・石組みを持たず、五輪塔などの石塔のみを墓標とする墓である。確実なのは、56号墓と60号墓である。これらが、造立するのは、墓群の南端部分で、双墓と考える60号墓は、丘陵端を削って作り出されたテラス上である。年代は、14世紀末から15世紀初頭で本墓群の最終段階での造立と考える。

### 墓道について

墓道は1次調査で復元を試みた結果にはほぼ合致した。墓域東側をたどるもの、南東から中央部に向かうもの、テラス部分に向かうものに大きく分けられる。墓道上にむりやり築かれたような墓はほとんど見あたらず、おのおのの墓へは他の墓を踏みつけることなく概ねたどり着ける。これは造墓が、丘陵上では百数十年と短期に終焉を迎えることから、墓域に余裕があり、墓道上に築造しなくても十分なスペースを確保できたことによるものと考えるが、造墓した各集団がそれぞれのまとまりを意識していたとも考えられ、被葬者の集団が造墓年代に応じて連絡とこの墓群を形成していった結果ではないかと考える。その意味で本墓群の中で墓道の復元は、本墓群を理解する上で重要な位置を占め今後細部に至る検討が必要と考える。

## 2. 造墓の年代と群構成

ここでこの墓群の造墓年代と墓群構成を現時点で理解しうる点について述べる。1次調査で主軸方向や墓の分布からⅠ~Ⅳの群に分けた。今回の調査結果から墓群全体をもう一度整理し、今後の整理のたたき台としたい。ただし調査員の誤解から1次調査の概報の主軸方向が30度ずれており訂正したい。全ての数値に時計回りに30度加えて考えて

いただきたい。区分の方法は、前回同様、墓の分布、及び主軸方向から区分する。墓の主軸は基本的に墳丘裾（下端）をとらえて同一方向のものを群とするが、墳墓の方向に対する意識が墳頂上の石組みにあると捉えたものは、この方向で区分した（5・8・9・16号墓及び十星上墓など）。この方法で群を分けると次の通りで、今回新たにⅦ群からXⅣ群を設定した。

I 群	1・8・16・17・20号墓
II 群	2・2-1・2-2・3・4号墓、（3-1号墓）
III 群	5・6・7号墓
IV 群	11・14号墓
V 群	12・13号墓
VI 群	9・10号墓
VII 群	18・19号墓（上：壇墓）
VIII 群	21・22・52・53・54・57・58号墓（集石墓）・65・66・67号墓
IX 群	23・24号墓（集石墓）
X 群	25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・41・号墓・48円形集石
X I 群	44・45・46号墓、47造墓区画・43・64号墓
X II 群	49・50・51・55号墓
X III 群	60・56号墓（五輪塔）
X IV 群	61・62・63号墓

このうちⅦ群とⅨ群は、集石墓のある地形から1群にまとまる可能性がある。

X群は48号円形集石を中心に造墓された感があり、墓の正面を西側に向ける意図が感じられるところから1群にまとめた。

X I群は平面形が、方形で1辺が約10m～5m、墳丘の高さも1m前後の大型の墓で正面は、南もしくは南東で日没の方向を指す。この群は、45号墓から出土した白磁の戦骨器並びに土師質皿（12世紀後半）から本墓群の最も古い墓を中心になり立っており、1次調査で地形的にみて最も古い造墓と考えた1号墓を含むI群とともに本墓群の成立期の群と考える。1号墓と45号墓を結ぶ線上には、本墓群の立地する丘陵の主尾根にあたり、このラインが基軸となって造墓が進められたと考える。25号墓から29号墓はこの主尾根上に立地し標高も高いが、I・X I群とは造墓に対する観念が、墓の向きや構造に現れており別に区分した。

X II群は、丘陵の縁辺部に築造された方形の墳丘墓で同一軸方向を持つものである。55号墓の遺物から13世紀末から14世紀初頭の群と考える。

X III群は、丘陵端や墓域南端のテラス上に築かれた五輪塔墓である。五輪塔や出土遺物から14世紀末ないし15世紀の造立で、本墓群の最終段階のものと考える。

X IV群は、墓群東側の墓道脇の1群である。立地・軸方向からVI群と関係するものかもしれない。

全体を概観すると、本墓群はI・X I群の築造が行なわれる12世紀後半に始まりII・X群などが築かれる14世紀前半まで造墓活動が続き、ややあって14世紀末あるいは15世紀にX III群が現れ終焉を迎えたものと考える。

### (3) まとめ

以上であるが、保存を前提とした調査のため未だに未調査の部分があり、また分析を終えていない部分が多くある。例えば各墓の年代の決定、双墓（夫婦墓）の分析、出土した埋葬骨の分析、それらをふまえた被葬者の検討などまだ多くの課題が山積している。これらを整理検討する作業の中で、本地域の中世初期の様相が、かなり明確になると思われる。そこで、これまで明確になった点と問題点を列記し、今後の課題を明確にしたい。

1. 造墓年代は、12世紀後半から15世紀に及ぶが、14世紀前半に一度途切れ、南端のテラス部分が作り出される14世紀末から15世紀に五輪塔をもつ造墓がなされ終焉を迎える。
2. 造墓は、1号墓と45号墓を結ぶ本丘陵の主尾根に軸線を設け、西側に並ぶ大型の墳丘墓、47号の造墓区画とみられる部分などを計画的に配置している。
3. 墓の形態は、方形・長方形の墳丘墓、円形・梢円形の墳丘墓、平面に集積した集石墓、五輪塔を持つ塔墓、土塼墓の他に、土壙上に集石を置いて埋葬した土壙上墓などがある。
4. 25号墓～41号墓・48号円形集石までのX群とした墓群は、あたかも集団墓の様相を呈し、他に設定した墓群と埋葬観念が異なるように見受けられる。有力豪族、武士団などいろいろな想像をかき立てるが、非常に特徴的な墓群であり、他の類例を検索する必要がある。
5. 集石墓、塔墓、一部墳丘墓に双墓（夫婦墓？）とみられるものがある。主体部を2ヶ所持つ6号墓、21・22号墓、23・24号墓、49・50号墓、2基の五輪塔が立つ60号墓などがあげられる。夫婦墓は、中世の「家」を中心とする社会の象徴と言われているが、本墓群における位置づけをどう考えるかが課題である。
6. 埋葬方法は、火葬、土葬があるが、火葬が全体の約84%を占め、土葬と考えられるものは約13%と圧倒的に火葬が多く、なかでも方形・長方形の墳丘墓に火葬された例が約60%と多く、本墓群の埋葬の特徴となっている。
7. 藏骨器による埋葬が、今までのところ13ヶ所で確認された。白磁四耳壺1、八尾焼1、珠洲焼11と珠洲焼が大勢を占め13世紀代から15世紀代までの壺、瓶、蓋として利用された檜鉢などが出土している。これらの珠洲焼には、類例の見あたらない装飾壺や、他の焼き物と器形の似かよったものがみられ、特徴的である。また、器形の歪んだ物が目に付き、埋葬用として焼かれた特殊な物が含まれている可能性を孕む。他の焼き物との比較が必要なのかもしれない。

以上であるが、12世紀後半から13世紀は古代から中世の転換期とされる。それがどの時点からは意見の分かれるところであろうが、本墓群の成立が12世紀後半であることが判明したことから、本墓群の造墓意識の中にそうした時代背景があるのではないかと考える。本墓群の成立期、方形の大型墳丘墓が次第にその規模を減じる点や、墓の拡張の際に見受けられる同族墓とみられる墓の存在、双墓や集団墓的な墓の存在これらを年代を追って体系的に整理することが本墓群を整理する上の最大の焦点と考えている。未熟な検討に終始したが、多くの方々の検討と真摯な批判を乞いたい。

#### むすび

本墓群は、次年度以降も調査は継続し、周辺調査も行なう予定である。明年度は、黒川村山中に約千年前にあったと言われる旧真興寺の比定地、古寺（ふるいでら）と、上山古墓群東側にある平坦面の調査を計画している。これらの調査を行なう中で順次検討を加え本地域におけるこの墓群の姿を明確にしていきたい。上市町教育委員会では、本墓群の整備と一般への公開を目的として、この調査事業に着手している。調査の最終年度には本報告の刊行も予定しており諸氏のさらなるご協力を願うものである。

第2表 填丘墓·集石墓·塔墓一览

No.	墓碑名	位 置	坐标方位	E (m)	W (m)	南北偏角	土物方位	填 项	项 面	品 种	长轴×短轴 (m)	主 体 部 分	长轴×面宽×深浅 (m)	带 法	考	
															形状	状态
23	20号墓	X=79185 79188 Y=21375 21377	N30-W	1.26*1.28*0.06				N34-E	4椭 方形	0.68*0.84					不明	
24	21号墓	X=79184 79186 Y=21372 21373						N31-E	6椭 万字	1.00*0.84					火葬	集石墓
25	22号墓	X=79182 79184 Y=21373 21374						N39-W	4椭 方形	1.10*1.08					火葬	集石墓
26	23号墓	X=79183 79184 Y=21377 21378						N90-W	石圆 方形	2.58*1.68					火葬	集石墓
27	24号墓	X=79184 79182 Y=21376 21379						N90-W	石圆 方形	2.58*1.68					火葬	集石墓
28	25号墓	X=79181 79183 Y=21380 21383	N84-E	万形	3.00*2.34*0.43			N80-E	6椭 万字	1.62*1.42					火葬	集石墓
29	26号墓	X=79180 79181 Y=21380 21383	N84-E	万形	3.00*2.24*0.47			N80-E	4椭 方形	1.62*1.13					火葬	集石墓
30	27号墓	X=79178 79180 Y=21380 21383	N84-E	万形	2.58*2.40*0.46			N82-E	4椭 方形	1.32*1.44					火葬	集石墓
31	28号墓	X=79176 79177 Y=21381 21384	N88-E	万形	2.74*1.84*0.32			N88-E	石圆 方形	1.78*1.40					火葬	集石墓
32	29号墓	X=79173 79176 Y=21381 21385	N88-E	万形	3.04*2.76*0.23			N87-E	4椭 方形	1.02*0.78					火葬	集石墓
33	30号墓	X=79173 79175 Y=21381 21385						N12-W	石圆 方形	1.50*1.50					火葬	集石墓
34	31号墓	X=79178 79181 Y=21384 21387						N85-W	7椭 方形	1.32*1.50					火葬	（或骨器）
35	32号墓	X=79183 79188 Y=21384 21388	N02-W	万形	4.90*4.60*0.39			N01-E	7椭 方形	3.24*3.20					火葬	
36	33号墓	X=79173 79178 Y=21384 21386						N87-W	石圆 方形	2.14*2.12					火葬	
37	34号墓	X=79176 79178 Y=21387 21388						N89-W	6椭 土圆上	1.36*0.89					火葬	五瓣状地輪
38	35号墓	X=79175 79176 Y=21389 21391						N05-W	7椭 土圆上	2.00*1.66					火葬	
39	36号墓	X=79173 79175 Y=21392 21393						N79-E	7椭 方形	1.58*1.22					火葬	（或骨器）
40	37号墓	X=79171 79173 Y=21392 21394						N74-E	7椭 方形	1.64*1.26					火葬	
41	38号墓	X=79169 79170 Y=21393 21395						N76-E	石圆 方形	1.60*1.68					火葬	
42	39号墓	X=79179 79180 Y=21392 21395						N86-E	7椭 方形	1.30*1.08					火葬	
43	40号墓	X=79181 79183 Y=21391 21392						N04-W	7椭 方形	1.30*1.08					火葬	
44	41号墓	X=79181 79183 Y=21388 21389						N39-W	石圆 方形	0.86*0.70					火葬	
45	42号墓	X=79182 79183 Y=21387 21388						N15-W	石 圆	0.88*0.82					火葬	集石墓
																珠州（或骨器）

46	43号器	X=79184 79185 Y=21380 21384	N85-E	方形	4.72*4.11*0.80	N13-W	石组 方形	2.38*0.82	不明	火葬
47	44号器	X=79168 79173 Y=21388 21393	N88-W	方形	4.94* 0.45	N10-W	石组 方形	3.20*1.20	熟石灰	白陶四耳罐(罐身器)
48	45号器	X=79164 79171 Y=21380 21386	N17-W	方形	5.80*5.76*1.10	N15-W	石组 方形	2.80*7.74	熟石灰	上部盖置 2枚
49	46号器	X=79165 79169 Y=21376 21380	N12-W	方形	4.08*3.86*0.93	N13-W	石组 方形	1.38*1.12	熟石灰	
50	47号器	X=79169 79177 Y=21373 21380	N65-W		7.94*5.98*0.78	N06-W		6.54*1.52	活塞(内胆)	
51	48号器	X=79177 79180 Y=21389 21391				円形集石	2.50*2.12		円形集石	
52	49号器	X=79171 79173 Y=21387 21391	N80-E	长方形	7.42*2.40*0.31	N85-E	石组 方形	1.12*1.10	不明	火葬
53	50号器	X=79169 79171 Y=21387 21400	N80-E	长方形	7.42*2.40*0.31	N86-E	石组 方形	1.04*1.00	不明	火葬
54	51号器	X=79164 79167 Y=21390 21393	N04-W	方形	3.00*2.46*0.45	N05-W	石组 方形	1.62*1.54	小明	火葬
55	52号器	X=79166 79168 Y=21387 21389				N47-W	石组 方形	1.64*1.35*	不明	火葬
56	53号器	X=79162 79164 Y=21383 21384					石组	1.54*1.26*	小明	火葬
57	54号器	X=79163 79165 Y=21389 21392				N39-E	石组	2.26*1.58*	不明	火葬
58	55号器	X=79157 79159 Y=21381 21383				N01-E	方形	2.12*1.80*	円形	珠圆(嵌骨器)
59	56号器	X=79163 79164 Y=21377 21377				N35-E	塔器	0.28*0.26*	小明	火葬
60	57号器	X=79165 79167 Y=21374 21375				N48-E		1.02*1.00*	不明	火葬
61	58号器	X=79166 79167 Y=21373 21374				N43-E	石组 方形	0.52*0.65*	不明	火葬
62	59号器	X=79168 79169 Y=21372 21373				N78 E	石组 方形	0.90*0.68*	不明	火葬
63	60号器	X=79160 79163 Y=21380 21385				N14-W	石组 方形	3.34*2.78*	长方形	2.80*1.38*0.50 东临西介南2.5 珠圆(嵌骨器)
64	61号器	X=79194 79196 Y=21386 21399	N87-E	方形	3.26*3.01*0.68	N89-E	塔器(灰量器)	1.80*1.56*	小明	火葬
65	62号器	X=79192 79194 Y=21386 21391	N79-E	方形	3.32*3.54*0.30	N81-E	石组 方形	1.48*1.30	不明	火葬
66	63号器	X=79186 79191 Y=21388 21388	N70-E	方形	4.74*3.68*1.17	N66-E	石组 方形	2.58*1.84	不明	一屈膝葬
67	64号器	X=79180 79184 Y=21340 21303	N85-E	方形	3.74*3.28*0.58	N89-E	石组 方形	1.72*1.96	不明	火葬
68	65号器	X=79175 79176 Y=21402 21403	十型			N36-E	石组 長方形	1.66*1.17*	不明	火葬
69	66号器	X=79174 79175 Y=21404 21406	十型			N37-E	石组 方形	1.52*1.04*	不明	火葬
70	67号器	X=79173 79174 Y=21406 21407	土器			N34-E	石组 方形	1.10*1.06*	不明	火葬

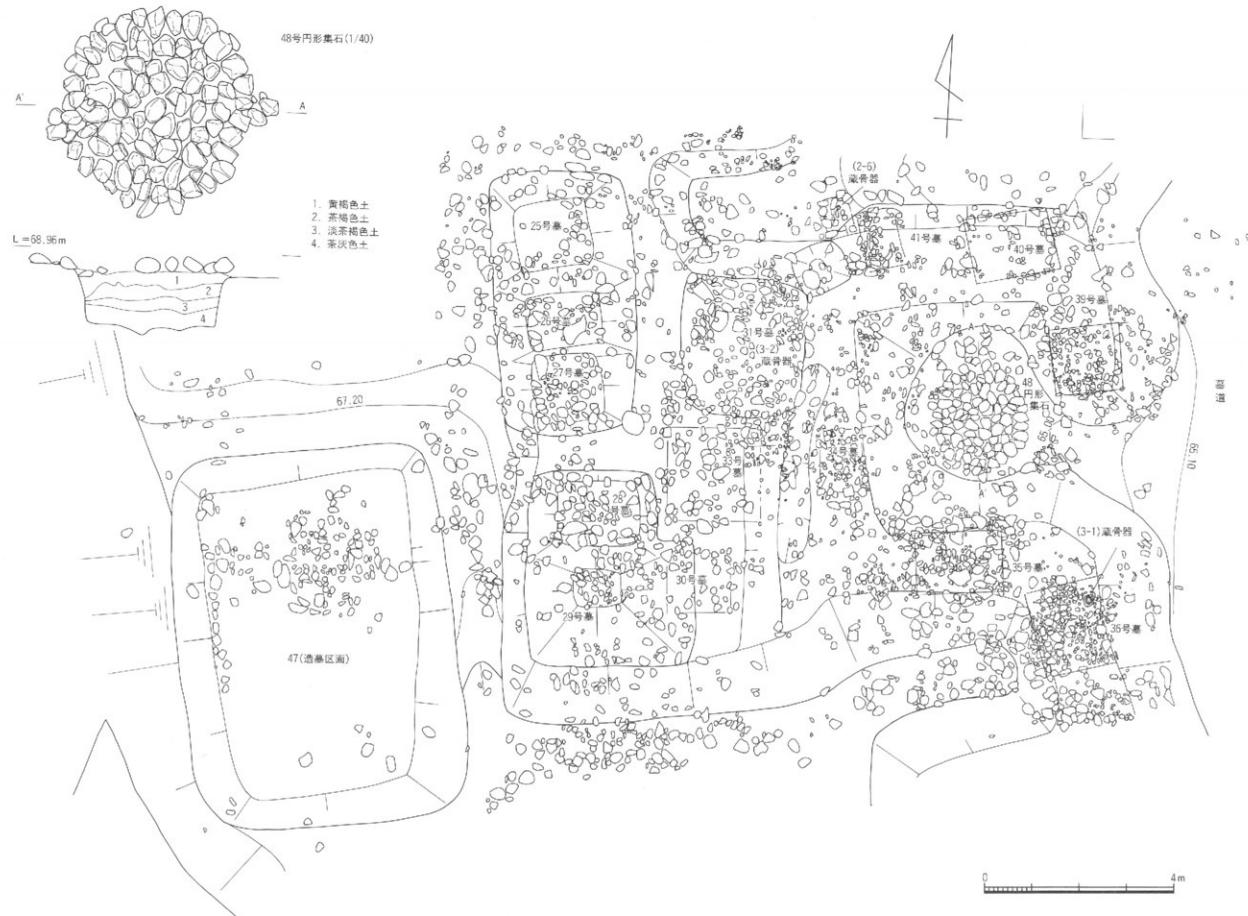
## 引用・参考文献

- ア 石井 進・萩原三雄編 1991 帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集「中世社会と墳墓－考古学と中世史研究－」名著出版
- 磐田市教育委員会 1993 「一の谷中世墳墓群遺跡」
- カ 『角川 日本地名大辞典 16富山県』 1980 角川書店
- 上市町教育委員会 1995 『黒川上山古墓群発掘調査概報』
- 岸本雅敏 1979 『銭堀山遺跡の調査－井波町清玄寺所在の中世墳墓発掘調査概報－』富山県教育委員会
- 京田良志 1972 『寺跡・經塚・磨崖仏・建物跡など』『富山県史考古編』富山県
- 楠瀬 勝・久保尚文・木本秀樹・大山喬平 1984 『第1章鎌倉時代の越中第2節莊園の様相』『富山県史通史編 I 中世』富山県
- サ 坂詮秀一・森 郁夫編 1986 『日本歴史考古学を学ぶ 中』有斐閣
- 静岡県考古学会 1997 シンポジウム1996年度『静岡県における中世墓』資料
- タ 滝上秀明 1989 『辰口町湯屋チョウズカ遺跡』辰口町教育委員会
- 鳥取県東伯郡大栄町教育委員会・奈良大学文学部考古学研究室 1985 『妻波古墓』奈良大学文学部考古学研究室調査報告書第11集
- ナ 中川成夫 1959 『越後華報寺中世墓址跡群の調査』『立教大学文学部史料調査報告4』
- 中野豈任 1988 『忘れられた墓場』平凡社
- 奈良県立橿原考古学研究所 1987 奈良県文化財調査報告第51集『広瀬地藏山墓地跡』
- 西井龍儀ほか 1993 『医王は語る－医王山文化調査報告－』福光町・医王山文化調査委員会
- ハ 横原町教育委員会 1978 『奈良県宇陀郡大王山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 藤井正雄 1988 『墓地墓石大辞典』雄山閣
- 藤田富士夫 1984 『10杉谷群集墳』『富山市呉羽山丘陵古墳分布調査報告書』富山市教育委員会
- 北陸中世土器研究会 1992 『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会資料
- 北陸中世土器研究会 1994 『中世北陸の寺院と墓地』第7回北陸中世土器研究会資料
- マ 埋蔵文化財研究会 1983 『古代・中世の墳墓について』第13回埋蔵文化財研究会資料
- 三浦純夫 1986 『第4章 考察 墓地の再評価をめぐって』『絶縁遺跡』石川県埋蔵文化財センター
- ヤ 吉岡康暢 1989 『日本海域の土器・陶磁〔中世編〕－人類史叢書10－』六興出版
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 四柳嘉章 1987 『西川島-能登における中世村落の発掘調査-』穴水町





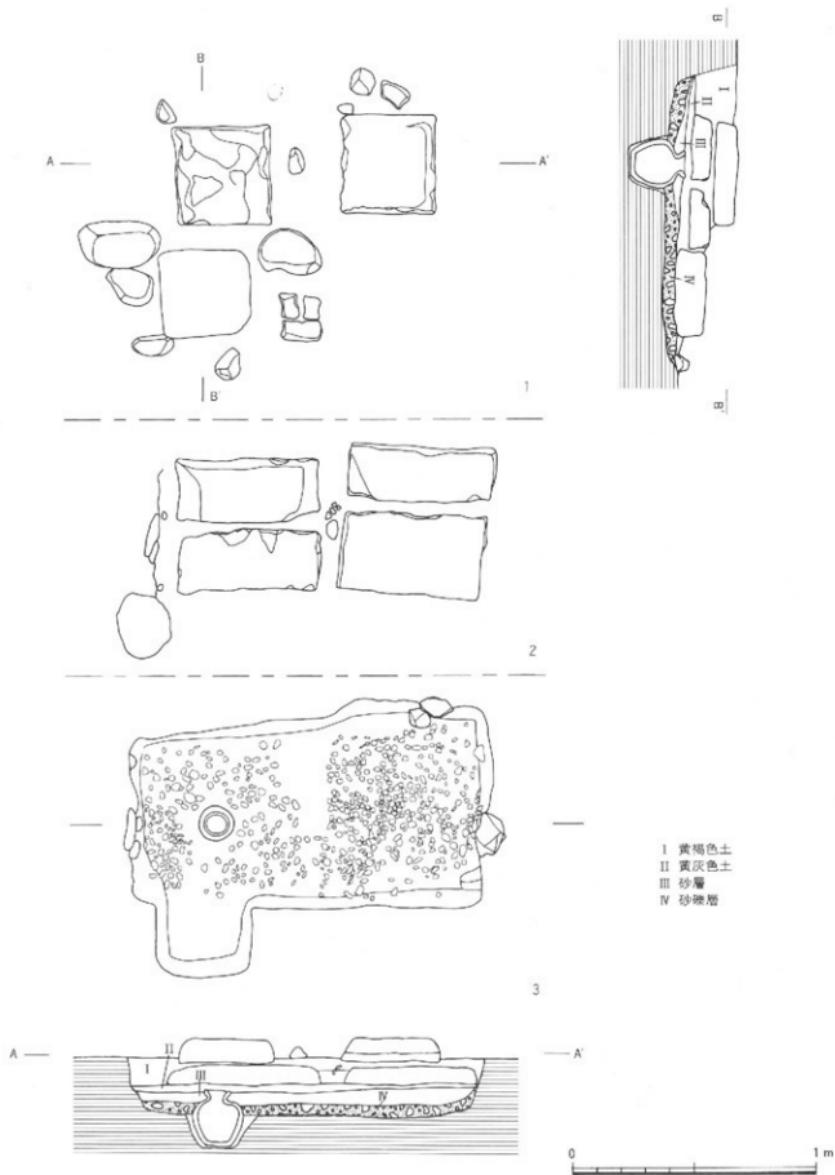
第2図 遺構実測図 (1/80) 20・24・32・43号墓 (10-12(2) 次調査)



第3図 造構実測図 (1/80) 25~31・33~36・39~42号墓及び47・48(円形集石)



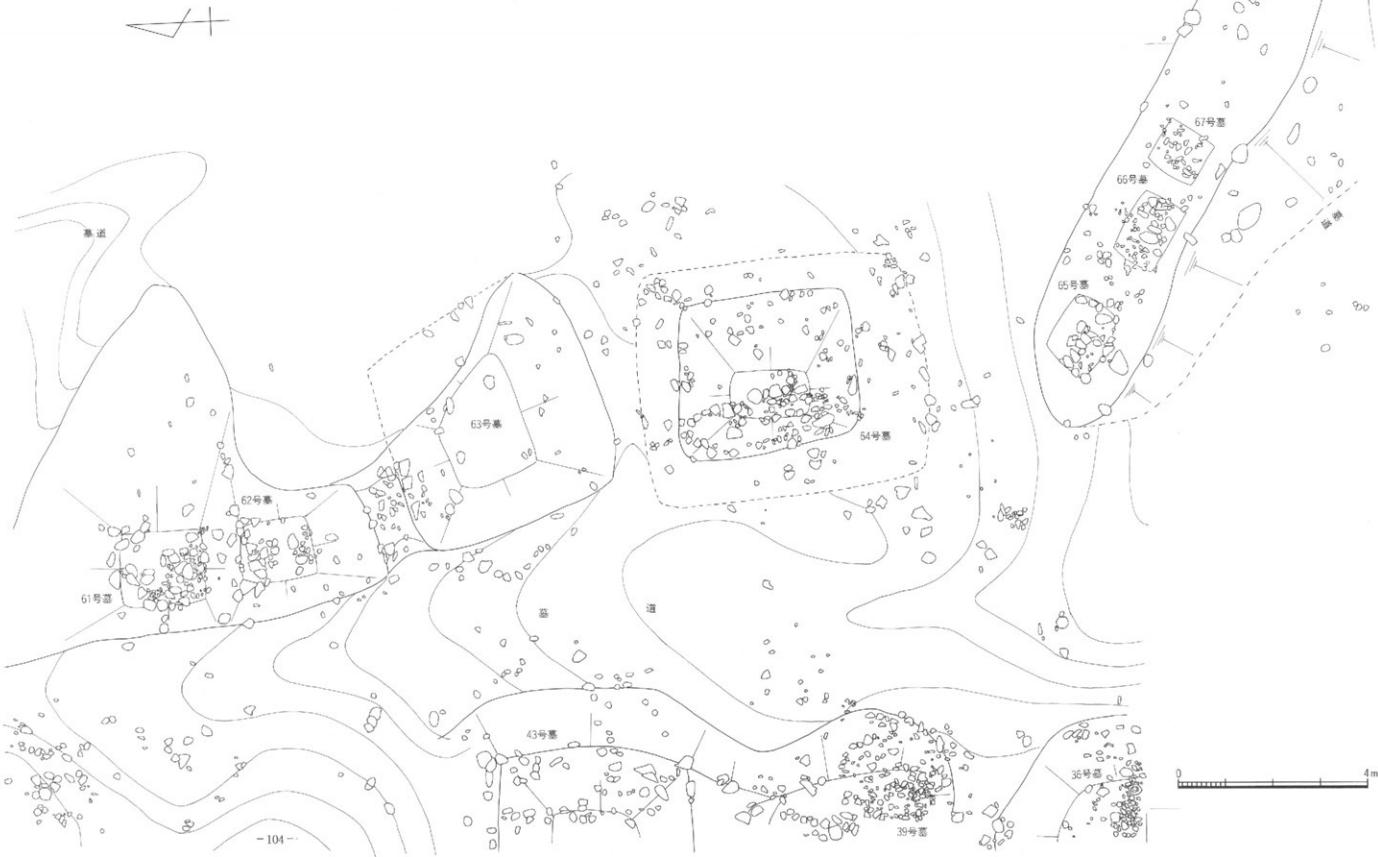
第4図 造構実側図 (1/80) 37・38、44～47、49～50分墓及び南側テラス -60  
-100-



第5図 60号墓五輪塔下埋葬構造実測図 (1/20) 1. 檢出面, 2. 上面台座除去, 3. 墓底面

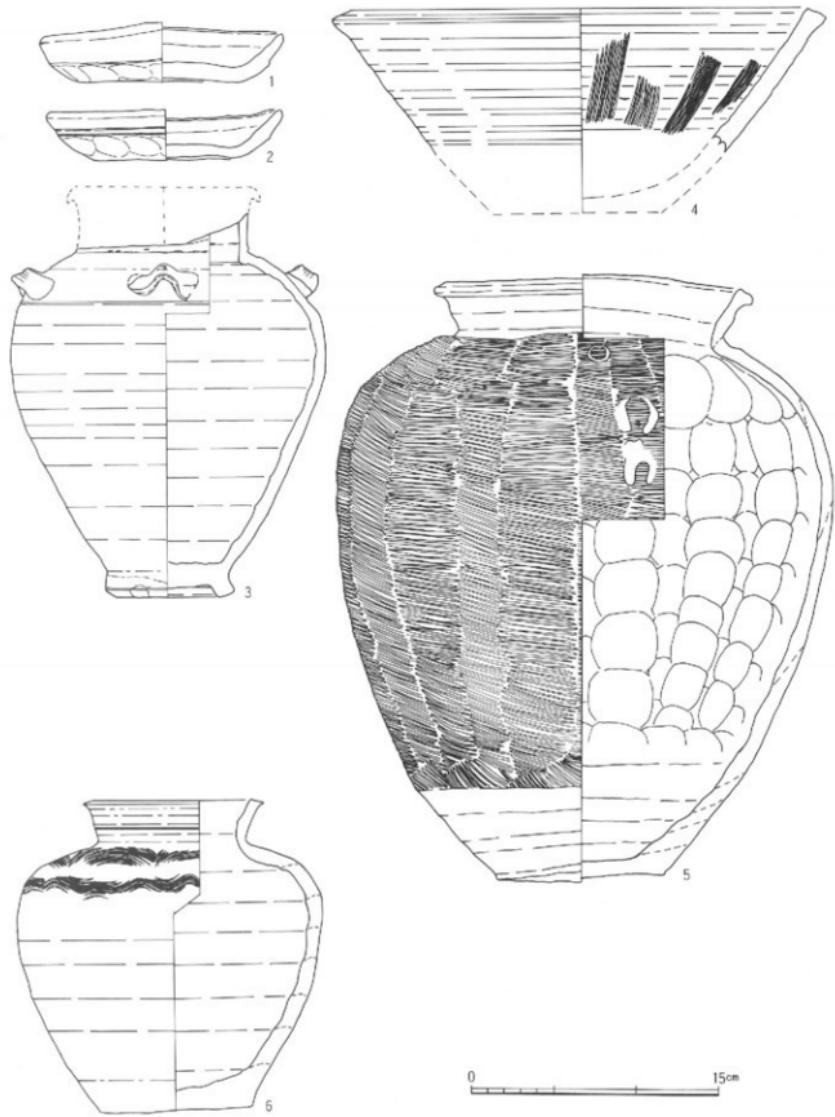


第6図 造構実測図 (1/80) 61-67号墓





図版1 黒川上山古墓群周辺航空写真（約1/6,000）



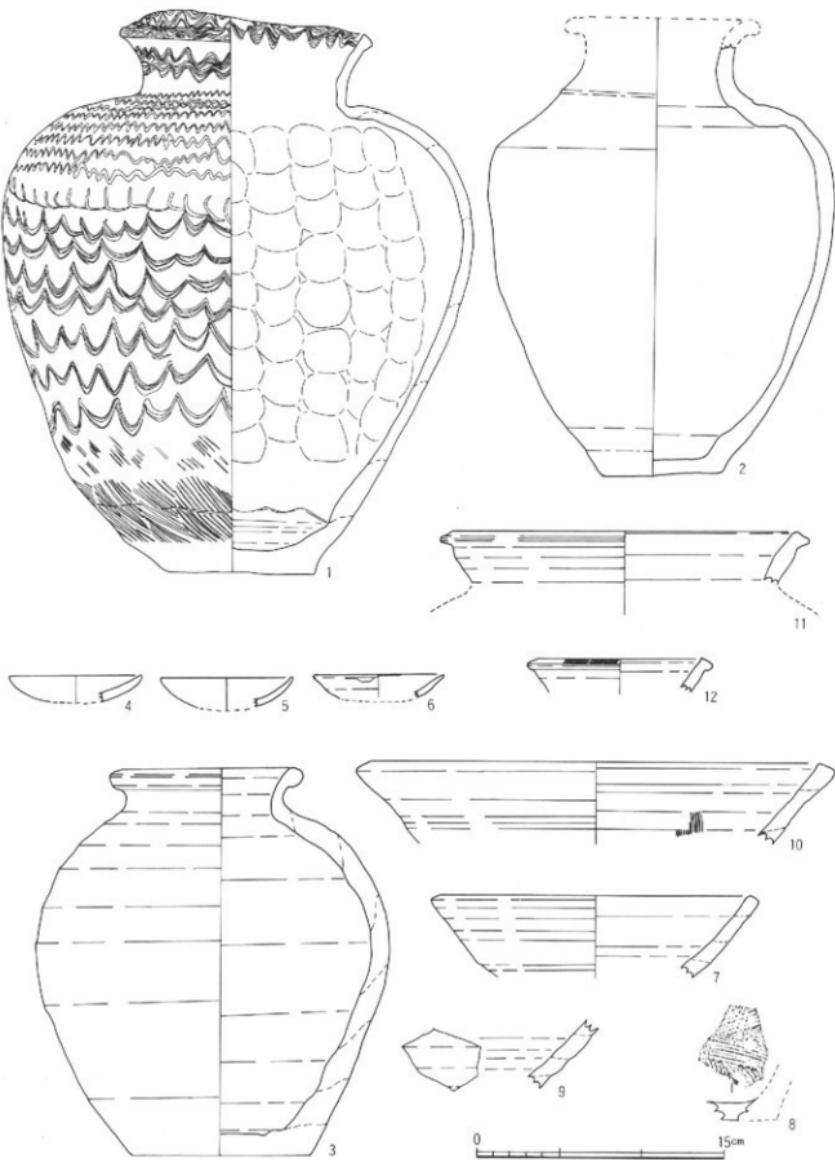
図版2 遺物実測図 (縮尺1/3)

土師質組 1・2 : 45号墓出土

白磁 3 : 45号墓出土

珠洲焼 4・5 : 55号墓出土

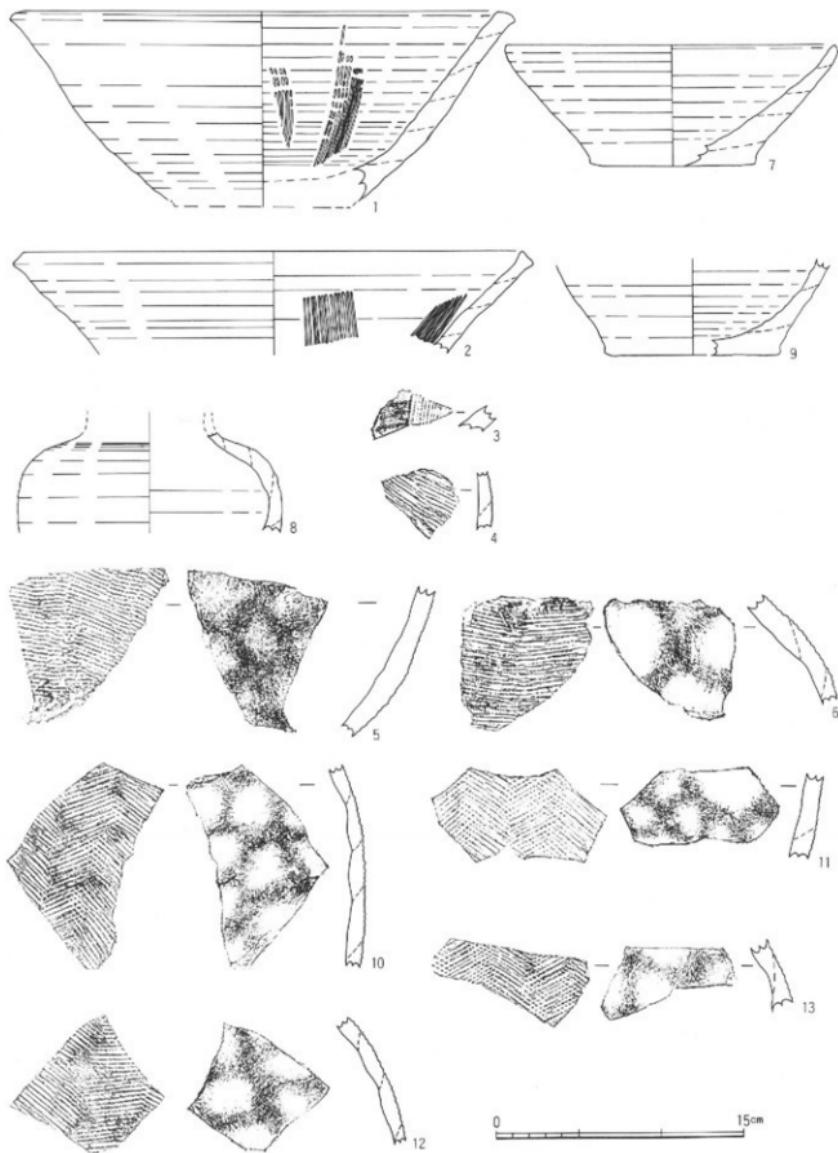
6 : 42号墓出土 (図版17参照)



図版3 遺物実測図 (縮尺1/3)

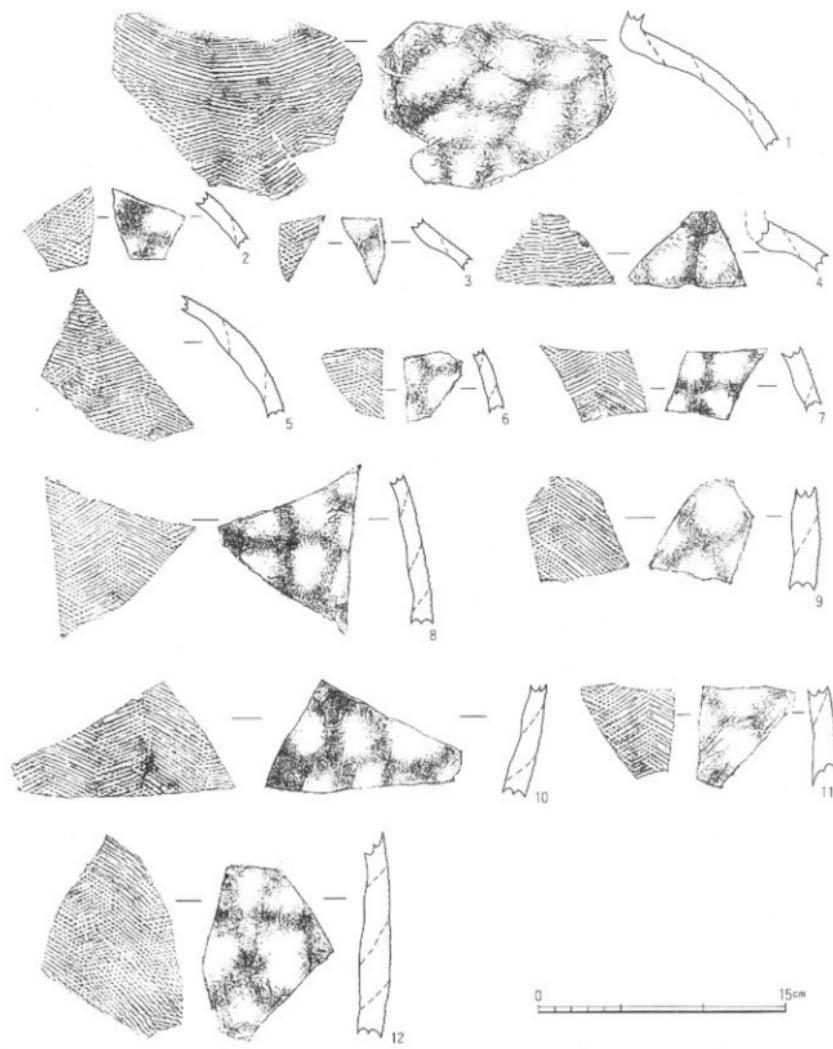
珠洲焼 1:36号墓, 3:60号墓出土, 11・12:34号墓周辺, 7・8:44号墓, 9・10:55号墓  
八尾焼 2:31号墓出土

土師質皿 4~6:60号墓出土 (図版17・18・20参照)



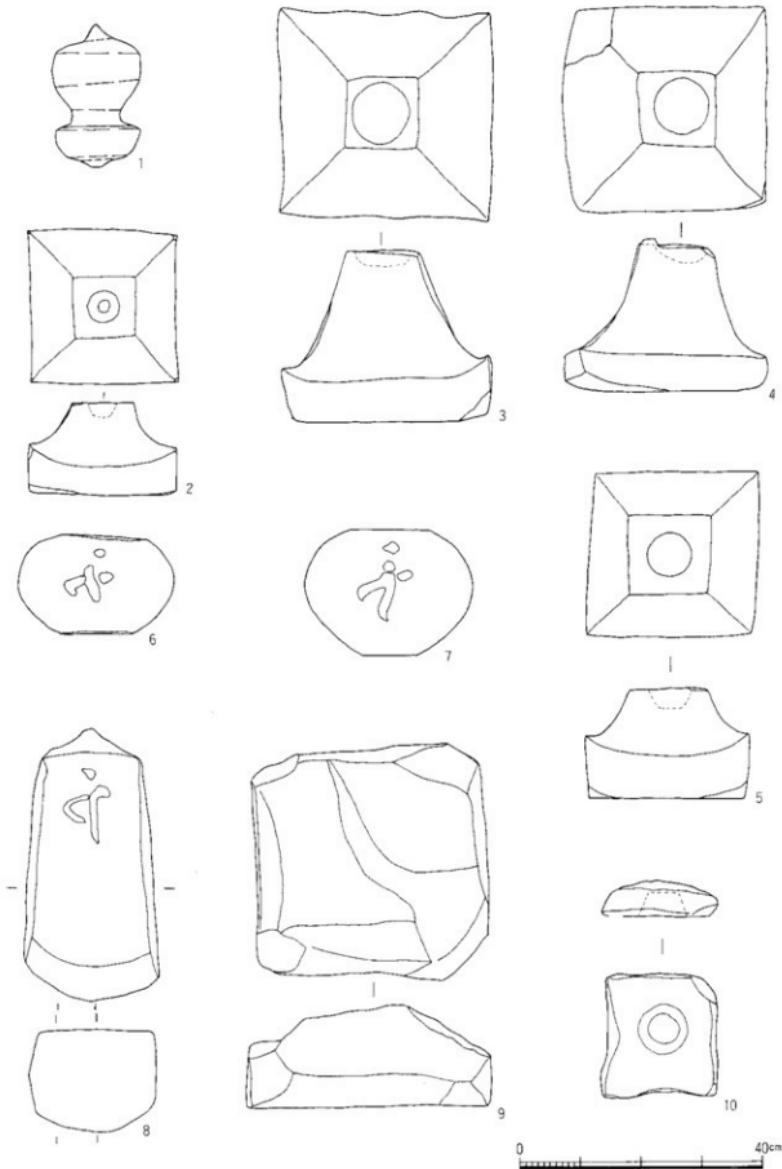
図版4 遺物実測図 (縮尺1/3)

珠洲焼 1：67号墓 2～6：54号墓，7～9：44号墓，10・11：37号墓，12：53号墓，13：33号墓（図版20・21参照）



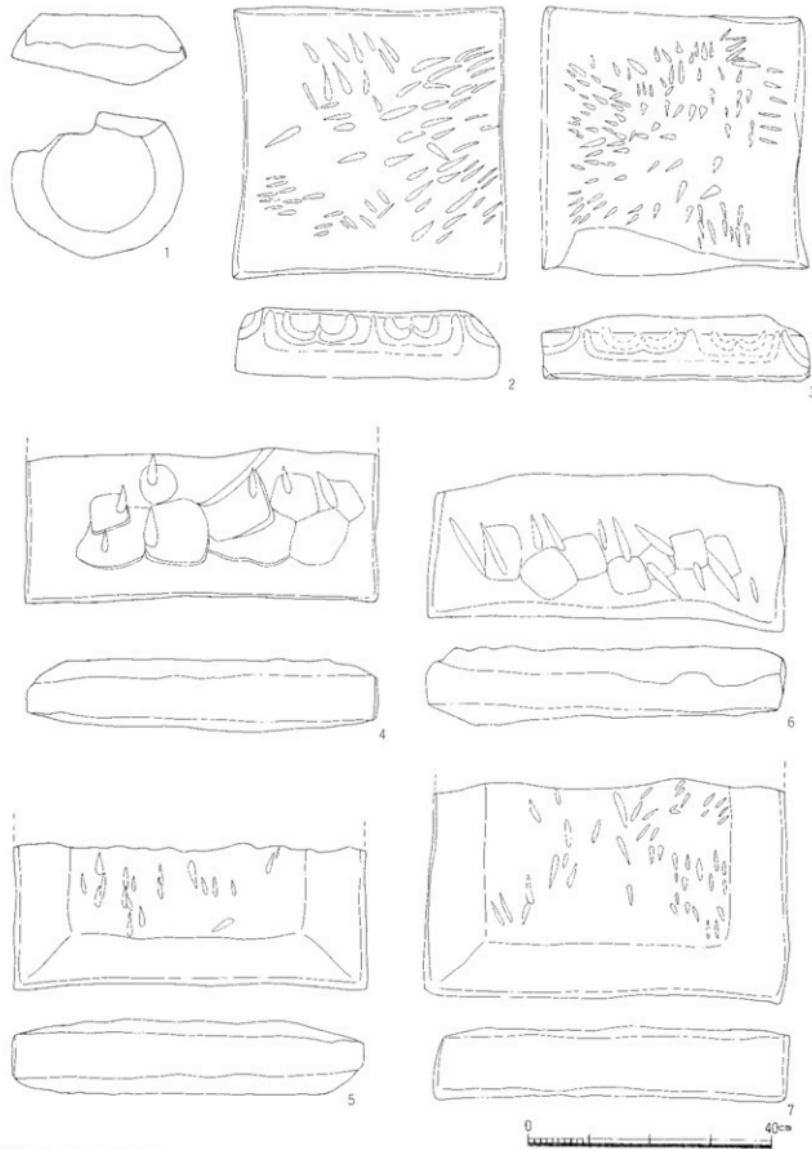
図版5 遺物実測図 (縮尺1/3)

珠洲焼 1~6・10~12:34号墓周辺, 7・9:41号墓周辺, 8:48号墓 (図版21参照)



図版6 遺物実測図 (縮尺1/8)

五輪塔 1～7・9・10：南側テラス  
板碑 8：南側テラス (図版18・19参照)



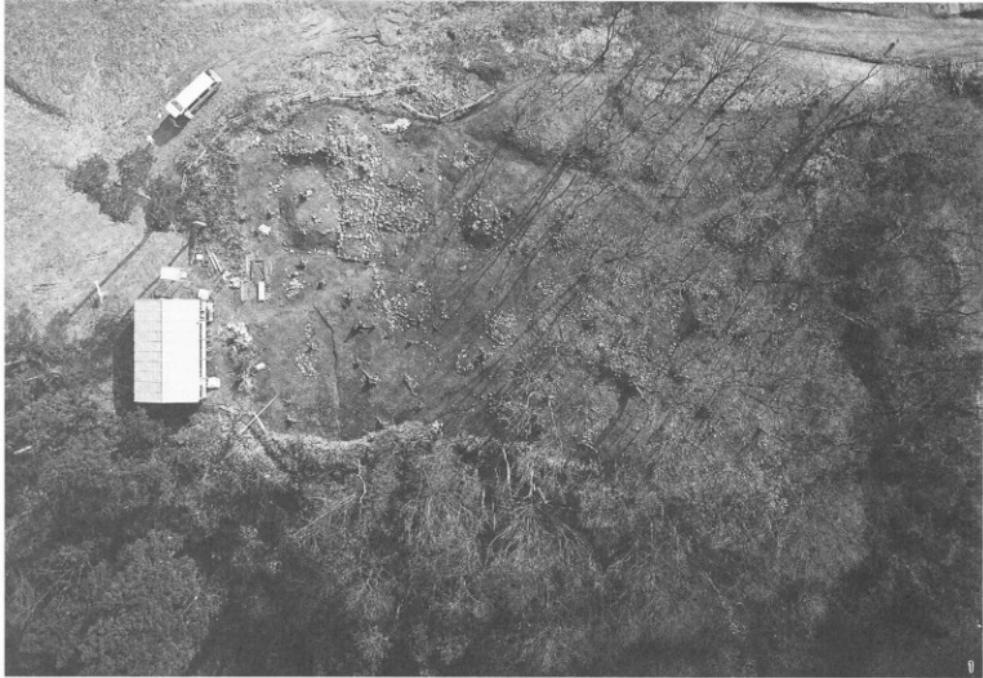
図版7 遺物実測図 (縮尺1/8)

五輪塔 1：南側テラス

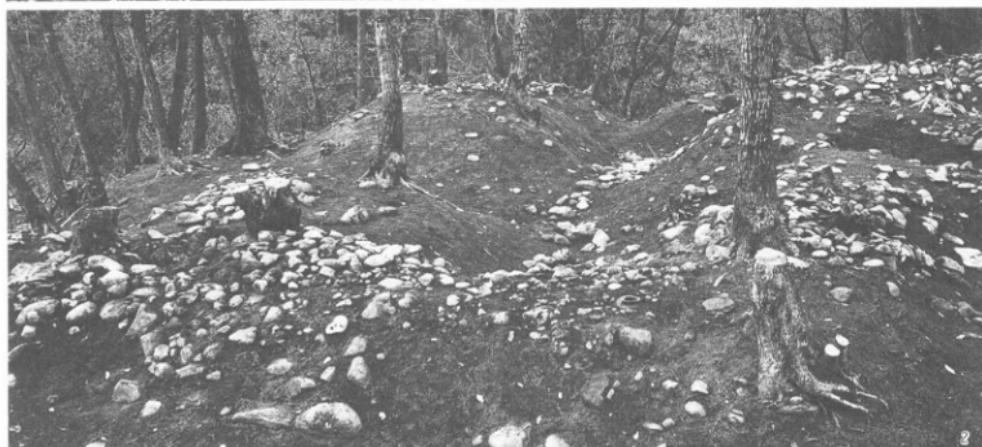
五輪塔台座 2～7：60号墓 (図版18・19参照)



図版8 1.遺跡遠景(南より), 2.遺跡全景(北より)



図版9 1.造構全景(上空より), 2.25~36号墓・39~42号墓及び48(円形集石束より)



図版10 1.25~31・34・44~46号墓(北より), 2.29・30・35~38・44~46号墓(東より)  
3.61~64号墓(北西より)



図版11 1. 44~46号墓(東より), 2. 44号墓(西より), 3. 45号墓(北西より), 4. 45号墓藏骨器出土状況  
5. 46号墓(西より)



図版12 1.47号造墓区画(北より), 2.51号墓(東より), 3.53・54号墓(南東より), 4.56号墓五輪塔(北西より)  
5.55号墓蔵骨器出土状況, 6.23・24号墓(北より)